

# 相克の水平線

帝都造営

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あらすじ

【第一部：瑞鶴編／ようこそ「艦これ」の世界へ】

目覚めると、ゲーム「艦これ」に登場する艦娘の「瑞鶴」になっていた……。信じられない事態に困惑する彼女に手を差し伸べてくれたのは同じく「艦これ」に登場する艦娘の「飛龍」。二隻の駆逐艦娘を従えた彼女の導きによって「瑞鶴」はこの不思議な世界と向き合うことになる。

※現状は第一部のみ執筆の予定です。よろしくお願ひします。

# 目次

## 第1部：瑞鶴編

しょうか	1
はじめり。	8
かぎぐも。	14
ていとく。	21
へいせい。	29
けんぞう。	37
せいかつ。	45
しんえん。	52
かいはつ。	58
あおぞら。	64
。	69
飛龍風雲。	74
二重規範。	80
航海日誌。	85
まきぐも。	92

【悲報】後輩に手を出してしまったのだけれど、どうすればいいので

## 第1部：瑞鶴編

【悲報】後輩に手を出してしまったのだけれど、どうすればいいのでしょうか

247：名も無き艦娘化さん  
今北産業

248：名も無き艦娘化さん

◇247

スレ主がずっと惚気てる

249：名も無き艦娘化さん

ええ……（困惑）

250：名も無き艦娘化さん

◇247

もはやssか何かの域。ssスレ。

251：名も無き艦娘化さん

◇250

面白そうだし読んでくる

252：名も無き艦娘化さん

◇250

俺たちの人生はssだった……？

256：名も無き艦娘化さん

◇250

ざっと読んできた。スレ主が変態で謎の情熱を持って書いてるのはよく分かった。

あともう一つ、ヤバイことが判明したんだけど……

257：名も無き艦娘化さん

◇256

なんぞ

268：名も無き艦娘化さん

◇ 267

いや、ちよつとホントヤバイことなんで。

269：名も無き艦娘化さん

ここまで来て隠すのか◇ 268！

270：名も無き艦娘化さん

そうだぞ俺たちの那珂じゃないか◇ 268!!

271：はんぶん、あおい

◇ 268

私からもお願いします。一体なにがヤバかったのでしょうか？

皆さん親切に様々なアドバイスをして下さいましたが、ヤバイと仰ったのはあなたが初めてです。何か問題があるのであればどうぞ遠慮なくお願いします。

272：名も無き艦娘化さん

◇ 271

うわあ主食いついた。

273：名も無き艦娘化さん

◇ 271

ただのヤバイ人になってる（知ってた）

274：名も無き艦娘化さん

◇ 271

あー……じゃあ正直に言いますけども。

スレ主さん。あなたの作ってくれた朝ご飯。美味しかったです。面と向かって言えなかつたんで。あと逃げるように出撃するのはちよつとどうかと思います。おはよう位は置き手紙じゃなくて直接言つて欲しかったです。

275：名も無き艦娘化さん

◇ 274

フアツ？

276：名も無き艦娘化さん

◇ 274

まさかの後輩ちゃん降臨!?!?

277：名も無き艦娘化さん

◇274

なんで「可愛い後輩」ちゃんがここにいるんですかねえ……

278：名も無き艦娘化さん

◇277

そろもう、あれよ。

279：名も無き艦娘化さん

◇278

当たり前だよなあ？

280：名も無き艦娘化さん

◇277

なんで関係持つまでお互い気づかなかったんですかねえ……

285：はんぶん、あおい

◇274

あとで私の部屋にきなさい。

307：名も無き艦娘化さん

で……主も後輩ちゃんも戻って来ない、と。

結局これどうなったん？

308：名も無き艦娘化さん

◇307

二戦目でしょ

「なにを見ているの」

「いや。加賀さんが一番へぼ可愛かった時の記r」

挑発的にはなった私の言葉は最後まで紡がれることを許されな  
かった。拳骨が落ちるまで僅かにコンマ数秒。目の前に火花が散つ

て、意識が刈り取られかける。

「……ッ！ いっただあああ……！」

本当にこのヒトは、手加減というものを知らない。首どころか身体中に響かんばかりの衝撃は、浴槽で起こした波のようにあちこちで跳ね返って何度も何度も往復する。私がそれを必死になつて耐えているのをいいことに、寝間着姿の「先輩」は私のスマホを取り上げる。「言つときますけど。その端末から消したつて二重三重のバックアップがありますんで、無駄ですから」

「謀つたわね、五航戦……」

恨めしげに視線を注ぎながらスマホを手放す彼女。サイドテールを解いてしまつていては彼女が「艦隊これくしょん」というゲームに登場する艦娘の「航空母艦加賀」であることには気付かないことだろう……余程の執着を持つていない限りは。

そういう意味では、恐らく私は執着を持つてしまった者な訳で。それは恐らく踏み越えてはならなかった一線なのだと思う。

私の視線を感じたのか、加賀さんも私を見て……それから眼を釣り上げた。

「というか、あなたまた髪が生乾きになつてるわよ。不衛生だからちゃんと乾かせとあれほど……」

「あーあーはいはい。何度も言いますけど私は自然乾燥派なんです」

私がそう言い返す間にも加賀さんはドライヤーを取り出すと私の背後に回る。私はされるがまま、加賀さんも何も言わない。スイッチを入れればその電化製品は私の耳元で騒音を奏で始める。電気の通つた部屋、背中を預けたくなる血の通つた温もり。それは今の「私」が当たり前のように享受しているもので、昔の「私」も一片の疑問も挟まずに受け取っていた普通。

ドライヤーの音が止んだタイミングを見計らつて、私は口を開いた。

「ねえ。加賀さん……加賀さんは、元の世界に戻りたいと思う？」

あの日。止める風雲ちゃんを振り切つて海に出た私は、言われた通りに一路、北西を目指した。飛龍先輩の情報は私の予想以上に正確

で、進路上には雲霞の如き敵の群れ。先輩が考えた通り何度も何度も死線を掻い潜ることになった。

それでも、私は諦めなかった。諦めることは許されなかった。先輩は一人なら絶対に行けると言ったらしい。なら、艦のスペックが圧倒的に上の私が行けないようじゃ話にならない。先輩から預かった艦載機の多くは喪つてしまった。私自身も何度も被弾して、この鎮守府の艦隊に拾われたときは満身創痍。辛うじて浮いているといったところ。そんな私を見た艦娘達は『こんなドロップ艦は初めて見た』と言われた。拾ってくれた鎮守府には申し訳ないけれど、あの時の私の絶望と言ったら！

なにせこの世界にはドロップ艦という概念が存在するのである。「ゲーム」であったからこそ成立するはずの概念が、平然と世界の摂理として組み込まれている。

つまりここは、そういう世界で。

「呪われているわ、この世界は。私たちも呪われている。きっと私たちは……」

加賀さんが呟くように言う。私と同じ存在ていとくであるという彼女。この鎮守府で一番の空母で、私の嚮導役を務めてくれたこのヒトがまさか同類だなんて夢にも思わなかった。私より長い間この世界を見てきたこの先輩は、なにを思っているのだろう。

私はゆっくりと待つ。内側で考えるのはこのヒトの「昔」からの癖か、はたまた「加賀」としての癖なのか。とにかくこのヒトは待つてあげないと話せないヒトだった。

私と天井、私と壁、私と机。至る所に視線を何往復もさせてから、加賀さんは言葉を紡ぐ。

「私たちは……私たちがここに呼ばれたのには何か意味があるのでしよう。でも、今のところは誰もそれが分かっていない。だから誰もが『元の世界』へと帰りたいと叫び、結局最後には諦める」

諦める。その言葉は私たち「提督」に重くのしかかる言葉だ。私たちの同類がどれほどいるのかは知らない。私みたいな新参者には教えて貰えないが、「提督」は各鎮守府を結ぶ巨大なネットワークを作る

ほど多いと聞く。先ほどのお遊びのような「掲示板」ですら、この世界に横たわる私たちにとつては氷山の一角に過ぎないと言うのだから驚きだ。

「私も、貴女に出会って嚮導役を務めさせられた時に思ったわ。もう私は加賀でしかないのだと。『むこう』と『こちら』のどちらが夢なのか分からなくなっている」

もつとも、現実が脳による認識でしかないと考えれば、どちらも現実なのかも知れないけれどね。自嘲気味に口角を吊り上げる加賀さんに、私は末恐ろしくなつて言葉を濁す。

「そういう、哲学者ぶつた加賀さんは嫌いです」

「でしようね。私も嫌になるわ。一日一秒、加賀として振る舞うほどに私が私として置き換えられていく。今の『私』には明確な目標がないのだもの。故に私の中で『加賀』が勝ることになり行動の主体は『加賀』になる、思考までもね。当然のようにあなたを指導している私に気付いた時、その瞬間まで疑問すら抱けなかつた自分に吐き気が差したわ。こんな世界で、自暴自棄にならない方がおかしいと思わない？」

今日の加賀さんはいやに饒舌だった。生憎酒は入っていないし、酒が入った加賀さんにこんな思考は出来ないはず。だからこそ私は怖くなる。このヒトが、この感情を表に出せないはずの加賀さんが、溢れるほどの恐怖を私に叩きつけてくるのが、怖くなる。

「……だから、私を抱こうと？」

場を和らげようと言つたはずの私の冗談。<sup>はいりよ</sup>ところが加賀さんは真面目な顔で頷いてしまう。

「ええ、そうよ。私が加賀に成り代わる前に、せめて加賀<sup>わたし</sup>に出来ないことをしてみせようと思つたの。毒を食らわば皿まで、というヤツかしら」

「あのですね……そこは嘘でも」

「あの掲示板<sup>スレ</sup>をあなたが知っている時点で言い訳が通用するとは思つていませんから。私はあなたの思うとおりの情けない変態ですし、それを今更隠そうとは思えないわ」

つん、と言つてのける加賀さん。掲示板の件についての恨みは消えそうにないけれど、私にそんな弱みを握られているからこそ、このヒトは素直になれるのかもしれない。

「そういうあなたこそ、元の世界に戻りたいとは思わないの？ 艦娘加賀と情を交わすことは、少なくともあなたを瑞鶴に置き換える行為ではなくて？」

加賀さんの言うことは、正しい。私の髪を梳いてくれる加賀さん、口を開けば辛辣な言葉しか飛び出さないけれど確かに私のことを想ってくれている加賀さん。揶揄うと可愛い加賀さん。

こうして加賀さんと言葉を交わすことが、私をこの世界にゆつくりと縛り付けるのだと思う。以前、私が飛龍先輩の元を飛び出したとき、私は何にも囚われてはいなかった。私と飛龍先輩の違いはそこにしかなかったのだと思う。

飛龍先輩は囚われていた。風雲ちゃんと巻雲ちゃん、その二人に囚われていた。でも、果たして先輩に囚われないという選択肢はあったのだろうか。私をはじめ飛龍先輩に自分の運命を委ねようとしたように、人間というのは誰かに頼らないと生きていけないのではないだろうか。

それなら私は、それを否定しようとは到底思えない。

「あの、加賀さん」

「なにかしら」

「話すと結構長くなっちゃうと思うんですけど……私のもう一人の『先輩』の話、聞いてくれませんか？」

そう切り出せば、加賀さんは意外そうな顔をして、それからふつと表情を緩めた。

「……ええ、いいわよ。夜は長いわ」

だって飛龍先輩も、幸せだったのでしょうか？

はじまり。

それは、どこにでもある当たり前の目覚め。体内で分泌されるメラトニンが眠りを誘うなら、眠りから目覚めへと引つ張るのは副腎皮質ホルモン。眠らない人間などいないし、逆に眠り続ける人間もいない。だからこそ、目覚めは不自然なものではない。

ところが、それは明らかに『異状』であった。俺は目覚めが良い方ではないし、そもそも先ほどまで俺は寝てなんていなかったはず。混乱するが、確かにそれは『目覚め』であった。半規管は身体が横たえていることを教えてくれるし、なによりブランケットによって覆われている。

訳も分からず見回すが、眼の前には知らない天井。いや、そんなことを言っている場合ではないだろう。幸いにも身体に痛みは感じない。起き上がることも、周囲を見回すことだって出来る。だけれども、ここは知らない場所。

何があつた。湧き上がるのはそんな疑問だけ。俺は確かに自宅の、そう何かがある訳でもない自宅にいたはず。そして寝ていた訳でもない。酒が入っていれば家に帰った途端に意識を手放してもおかしくはないだろう。残業続きであれば道端で倒れても、いやそれこそ会社で寝ていてもおかしくはないだろう。しかしそんなことは全くない。

部屋には何かを思わせる物は置かれていない。コンクリート打ちっぱなしの部屋。ドアすらないその出口の先には同じくコンクリートの廊下が広がっているのだろう。窓は反対側の壁に一つだけ。やはりというべきかこちらも窓硝子がはめられている訳ではない。まるで建設中の建物……まるで、うち捨てられたかのような場所。

訳が分からない。ここはどこだ、人攫いにでもあつたのだろうか。とんでもない発想が脳裏に浮かぶが、それならもつとこう……拘束とかがされていても良いのではないだろうか。

とにかく現実離れたその光景ではあつたが、人間慣れればどんなことでも不思議と受け入れられるようになるモノ。それを俺が受け

入れたことにしたことは……明日の心配であった。いや正確には今日、そして今日であることが問題なのだ！

窓の外は明るい。ここが何処だか知らないが、運ぶだけでも時間がかかったことだろう。地球の回る速度よりも早い移動手段はない。故に陽が昇っているということは即ち日付が変わり、次の日がやって来るということである。

そう。誰も知りはないだろうが、そもそも会社では推奨されていないので知られては困るのだが……俺は今日持ち帰り残業をする予定だった。それは昨日における明日、つまり今日使う会議向け資料の作成。無論会社で作業することも出来るしそうするべきなのだろう。しかしそうはいかなかった。そうするわけにはいかなかった。

理由は単純明快。俺が「提督」であるからである。といつてもそれは海軍の将官を示す敬称ではない。俺は会社員に過ぎないし、それ以上の価値を求められる人間ではない。「提督」というのは、とあるゲーム、ブラウザゲームの「艦隊これくしょん」における主人公のこと。現在はブラウザゲームでは恒例の期間限定イベントの真つ最中であり、その攻略をするために早く帰宅したかったのである。

そして、記憶での俺はそのゲームをしていたことしか覚えていない。つまり仕事は終わっていないわけ。このままでは大目玉を食らうのは必至。全身から血の気が引いていく、いや会議が酷くなるだけならまだいい。部屋の窓には観光地のような庭とその向こうに広がる青空。もう朝どころか昼である。遅刻となれば大目玉では済まない可能性だつてありうる。

最悪だ。これまで積み上げたものがガラガラと崩れる感覚。俺は二次元の美少女に欲情するような底辺のオタクではあるが、これでも現実生活はそれなりのメッキを施してやって来たつもりだった。それがゲームをしていて遅刻とは……。

もう全て放り出してもうひと眠りしようかとも思ったが、そもそも俺がいるのは何処とも知れない部屋であった。問題は会社のことだけではない。いやそれどころか、むしろこちらの方が問題ではないだろうか。知らない場所に連れられてきてしまった。俺が何かの事

件の被害者ならば、今回の無断遅刻にも情状酌量の余地はあるかもしれない。

いや、そもそも帰れない可能性もあるのか。そう冷静になると別の意味でも血の気が引いてきた。別の意味で。会議は頭を下げて別日にやればいい、しかし死んでしまったては「艦隊これくしょん」が、イベント攻略が出来なくなってしまう。それだけは避けたい。

とにかく、まずはここを脱出、そして帰宅しなければならぬ。いつまでもベッドの上になんて居られない。俺は帰るぞ！

そして、先ほどまで身体を横たえていたベッドらしきモノから足を床へと下ろす。そこにはまるで待つてましたと言わんばかりにスリッパが置かれており、何か作為性を感じなくもないが、まあそんな細かいことはあとの話。コンクリート打ちっぱなしとなれば流石に裸足で歩き回るのは気が引かれる。渡りに船だと考えることにして、足を通す。

「あ、れ……？」

ところが、何かがおかしい。スリッパに下ろした足がおかしい。まるで血の気が失せたように白い足。普段よりも細いようにみえるそれには、信じられないことに一本の毛も生えていなかった。立ち上がるところの騒ぎではない。思わず触れば、その足は確かに触られた感触を返してくる。どうやら俺の足で間違いないらしい。

毛が抜けている……毛が抜けると聞いて真っ先に思いつくのはストレス、そして……癌。投薬か放射線治療かは忘れてしまったが、癌治療の副作用で髪が抜けると聞いたことがある。

そこまで考えが回れば、まさか自分の頭に意識をやらない人間はないことだろう。いずれは禿げる可能性もあるとはいえ、足のようにさっぱり綺麗になくなっていては本当に堪ったものではない。慌てて伸ばした手が髪の毛にぶつかり、安堵。

そして、ことの異常性によろやく気付くことになる。

髪が、長くなっていたのだ。ちよつとやそつとの話ではない。それは肩を通り越し、肩甲骨の辺りまで達するほどにはあるだろうか。いやもつと長いかもしれない。とにかく、俺にとっては不自然なほどに

長い髪。手に取って確かめると、それは確かな艶と質量をもつてそこにあつた。

気のせいではない。思えば先ほどからずっと、頭になにか重しを乗せたような感覚が付きまとはいかなかっただろうか。それがこの髪の重みだとすれば、説明はつく。

なぜこんなに長いのだろうか？ 髪は自然に伸びるモノ。しかしこんなに長くなるのにどれほどの時間がかかるのだろうか。一ヶ月や二ヶ月では済まない。一年か、もしくはそれ以上。

では、それまで俺は……一体なにをしていたのだろうか。髪を放し、手を見る。自分の掌を開いては閉じる。特段意識することもなく思い通りに動くそれは、記憶よりもどこか頼りなくはないだろうか。指の一本一本が細くなつたように感じられ、怖気がした。

俺はいつたい、どれほどの間眠っていたのだろうか。しかし、そうであれば説明はつく。このよく分からない場所。ここが病院とは思えないが、それでも寝たきりの人間の世話が出来る場所に限られる。少なくとも俺の部屋では無理だろう。ということは俺は何かの事故か病気で倒れ、そしてここに運ばれ……。

まるでドラマか映画のよう。ウォーキング・デッド？ 28日後？ 「笑えない、な……ゴホッ。ほんと、笑えない」

それに加えて、言葉も思い通りに出てこない。掠れるような声。咳払いしてみても心持ち高くなつたような声が出るだけ。もしも年単位で寝込んでいたのならこんなこともあるだろう。とにかく笑っていられる状況ではない。先ほど挙げた作品のように正気を失つたヒト型の何かが襲つてくるのは勘弁だが、仮にそうでなかったとしても食べ物があれば人間はいずれ死ぬ。飲み水がないだけであっさり死ぬ。

「おおい……誰か、誰かいないのか？」

扉もない出口に向かつていうが、返事はない。本当にここには俺しかいないのか。そんなはずがあるものか。廃墟のような部屋だけけれど、それでもベッドにはブランケット、枕に白いシーツ。マットレスも悪い物ではない。ここが廃ビルだとは到底思えないし、そもそも俺

が寝たきりになっている間に世話をしてくれた人間がいるはずだ。枕元にナースコールがないかを一応探すが、そんな電子機器は見当たらない。

となればもう、歩いて探すほかはないわけで。

スリッパを履いて、立ち上がる。改めて自分の身体を見れば視界に入るのは無地の布で作られた簡易な服。恐らくこれが病衣というやつなのだろう。誰でも着られるように余裕をもって作られたのであろうそれに包まれる俺の身体は心なしか細くなつてよう。長い闘病(?)生活もあつて全身の筋肉が落ちてしまったのだろうか。そういえば、何年も寝たきりでは筋肉が衰えて立つこともままならなくなるといふ。とにかく、立ち上がったのは僥倖と考えるべきだろう。

そして廊下へと出る。案の定というべきか、廊下に誰か見張りが立っているかもしれないという俺の希望はあつさり潰えた。無人の廊下。窓がないせいか先ほどの部屋よりも暗いそこは、俺に恐怖心を与えるには十分なもの。

「だ、誰かいませんか……?」

返事がないなら誰もいないのだろうか、それでも言葉が通じない相手はいるのかもしれない。それこそ野犬でも飛び出してきたらどうなるだろう。こちらは丸腰、それに加えて身体は覚束ないのである。せめて枕を武器代わりにしようかとも思つたけれど、あまりに意味がなさそうなのでそれはやめた。枕じゃどうしようもない。

どうすれば、いやどうしてこんなことになつたのだろう。なんら見当も付かないこの事態には困惑するほか無い。何故俺はこんなところ、ここは何処で、そして今日は何年の何日なのか? 残念ながら彼女なんてものはいないが、まだ父親も母親も生きているし兄弟だつている。皆は何処へ……俺は、どうなつてしまうのだろうか?

そんな時だつた。廊下の向こうから、人影が現れたのは。

「えっ……?」

俺は足を止めた。それは安堵であるはずだつた。そして見ず知らずの人間に出会つた恐怖と好奇心でもあるはずだつた。

ところが、今の俺。「提督」である俺には、単なる驚愕でしかなかつ

た。

「よかった、目を覚ましたんですね！」

なにせ私を見て眼を輝かせる人影……その少女は。

「艦隊これくしょん」に登場する艦娘<sup>キャラクター</sup>。「風雲」だったのだから。

かざぐも。

「よかった、目を覚ましたんですね！」

「え……うそ」

何が、一体何が起きているのだろう。目の前にいる少女。スカートを履き、シャツにネクタイを締め、髪を結ってポニーテールにしている彼女。赤色の装飾具パレットにオレンジ色のリボンを結んだそれは、紛うことなき「風雲」であった。

そう、俺が毎日のようにプレイしているブラウザゲーム「艦隊これくしょん」に登場する艦娘キャラクターである。

「え、ちよつと待ってちよつと待って？」

いや。そんな事があるはずがない。「艦隊これくしょん」はゲームだ。何処にでもあるブラウザゲームに過ぎないのだ。つまりそのゲームの登場人物というのは架空の存在で、現実には存在しない。紙の上に描かれた絵と声優によって産み出された限られた声によって辛うじて消費者プレイヤーに認識されるモノでしかない。このような所謂「二次元」の存在が「風雲」であって、まさか俺と同じ「三次元げんじつ」に出てくるはずがない。

……とは、とはいっても。

俺にとつてそんな疑問は正直どうでもよかった。なにせ考えても見てほしい。目の前に、普段は立ち絵にじげんとしてしか認識できないはずの「風雲」がいるのである。俺の記憶と寸分の違いもない姿で彼女が目の前にいるのである。

いやしかし、しかし。そんなことがあってもいいのだろうか。俺は別に生まれてこのかた人類史に名を残すような素晴らしい偉業を成し遂げてきた訳ではない。どこにでもいる一般人、一般的な「提督」に過ぎない。そうだ、現実に艦娘が現れるなんてあり得ない。そっくりさん、良くてレイヤーさんだろう。そう考え直した俺は、咳払いをすると風雲……いや、風雲（仮）に問うた。

「コホン……もしかしてキミはさ、風雲とかいう名前だったりしないよね？」

その瞬間、二人の間に流れる微妙な間。

「え……う？」

あ、もしかしてこれやっちゃった？ やっちゃったヤツですかね？  
考えても見れば俺の立場は恐らく病人。それも髪が伸びきってしまうほどの長い時間を眠って過ごした病人だ。それは植物状態という奴に違いなくて、そして目の前の風雲（仮）はそんな俺を看病してくれていたのだろう。

そんな相手に、一番初めの質問がこれだ。引かれるのも当然。しかもこつちはオッサンときた。それはもう引かれることだろう。悪印象どころの騒ぎではない。

「あーと……つまり、その、違うの。あのね」

どう弁解したものか。言葉を選ぶ私を余所に、風雲（仮）は眼をそれはもうキラキラと輝かせはじめた。それはまるで何かに感激しているようで……感激？

「私の名前、分かるんですか？」

「え……あ、うん」

まあ、そりゃ新規艦娘が実装されるたびに全部確保してきましたし？ なんなら目元だけ見せられても見抜く自信はありますよ。ただまあそれはゲームの中での話であって、そもそもこの風雲（仮）が本当にそうとは限らないのだけれど……。

いや、待てよ。もしかして本当にそうなのか。

「え……本当に風雲？ 夕雲型駆逐艦何番艦の風雲なの？」

だとすればここは天国ではなからうか。俺の目の前に、艦娘がいる。二次元に囚われている艦<sup>キャラクター</sup>娘であるはずの風雲がいる。つまり彼女は風雲（仮）などではない。

「夕雲型の三番艦ですよ。そこはちゃんと覚えていてください、瑞鶴さん」

ぷくり、と頬を膨らませて指摘する風雲（マジ）。登場時の台詞にもある「ふううん<sup>風雲</sup>じゃないですよ」っていうのもこんな表情で言っていたと考えるとなかなか可愛いものがある。とはいえ機嫌を悪くしてもらっても困るので、俺は笑いながら手を振る。

「ごめんごめん。そうそう三番だよ。早めの番号だとは思ってたんだけど……」

そこまで言っただと、背筋が凍る。ちょっと待った、風雲このこは今、変な事を言わなかっただろうか。

「もお……こっちはとても心配したんですからね?」

私が言葉を失ったのに気付かずに続ける風雲。いやまさか、この子は真面目な艦娘として描かれていたはず。そんな冗談、言うわけがないよね。

「ごめん……風雲、もう一回言ってもらってもいい?」

「……え?」

首を傾げる風雲。その顔に浮かぶのは疑問よりも心配するような表情。俺は今、どんな表情をしているだろう。俺の表情は、そんなに心配されるようなものだろうか。しかし実際、笑顔を作る余裕はなかった。

「いいから」

「あ、はい。『こっちはとても心配したんですから……』」

「その前」

「えっと『夕雲型の三番艦です。ちゃんと覚えていてください』ですか?」

いや違うよ、そこじゃないんだ風雲。まるで焦らされているみたいで腹が立つ。まあ本人はまったくもって無意識なんだろうけれど。

「いや、そうじゃなくて……その次」

「えっと……瑞鶴さん?」

瑞鶴。

瑞鶴というのは、戦史マニアなら……いや「艦隊これくしょん」を嗜む「提督」なら誰もが知っている存在だ。幸運の空母、機動艦隊最後の旗艦。他社とのコラボやアニメや映画でのメディア露出も割と多く、なによりゲーム中で最強とはいかないものの十二分に強い。まあ俺はゲームでの強さ以上にその個性が好きなんですけどね。

まあ、そんなことは問題ではない。瑞鶴の魅力とかそういうのはどうでもいい。

「え、なに……瑞鶴？」

「えつと、はい？」

首を傾げる風雲。彼女に分からないのも無理はないだろう。しかし俺は瑞鶴キヤラクターではなく提督フレイヤー。どうやら風雲は誤解をしているらしい。

「いや、あのね？　瑞鶴ではないんだよ」

「違うんですか？」

驚きを隠せないといった様子で聞き返す風雲。勘違いにしては随分な勘違いもあったもの。確かに、今の自分は相当酷い見た目だろう。髪はすっかり伸びてしまっただし、筋肉も落ちた。だからと言ってね。流石に瑞鶴と俺を見間違えるのは……どうかと思うよ？

それにも関わらず、動悸が激しくなる。鼓動が耳鳴りになって、そんな身勝手なこの身体に俺は必死で櫂を飛ばす。そんな訳がないだろう。だって俺は、俺の名前は瑞鶴ではないのだから。

「あのね、勘違いしているようだけれど……」

確かに、口に出したはずだった。俺が瑞鶴ではない証明、俺が俺である証明。にも関わらず舌は乾いて言葉を転がさない。喉は詰まったように空気すらも通さない。俺の頭でたった今紡いだはずの名前しやうめいが、まるで霧のように消えてなくなる。

「あの……瑞鶴、さん？」

風雲が顔を覗き込んでくる。違う、違うんだ。俺は瑞鶴じゃない。瑞鶴っていうのは艦娘だろう？　俺は艦娘ではないし、そもそも性別だって違う。そんなハズは……。

いや、そんなハズがあるのだろうか？

思い返してみれば、俺の足は細かった。腕も頼りなく、指は細くはなかっただろうか。今当たり前のように出している声も、記憶にあるものと……いや、でも。この声は『瑞鶴のものではない』。だって、瑞鶴の声はもつと、こう……違う筈だ。

全ての定義が曖昧になる。俺はなんだ？　瑞鶴ではないだろう。しかし、今の俺が「提督おれ」であった証拠もない。そもそも何故眼の前に「風雲」がいる。彼女は二次元の存在だろう。三次元おれの世界にはいないはずの存在だろう。じゃあなんだ、俺が二次元あちらに来たとしても。ま

さか、俺がまさに今、立っている空間こそ……三次元げんじつじゃないか。  
いや、いやいや。そんな、ハズは。

否定する要素がない。足の裏に地面があるのかも覚束なくなつて、俺は思わず自分の身体を抱きしめる。寸分違わず俺の意図を実行してくれる両腕で胸を抱きかかえるようにして……それからふとあるモノに気付いた。

胸が、確かに主張していたのだ。その存在を。両腕に寄せられる形になつたその存在は病服の上からでも十分に認識できる。いやむしろ、何故今の今まで気がつくこともなかつたのだらうかと疑問に思うほどソレは確かに存在した。両腕で抱きかかえている場合ではない。慌てて両手で病服をはだいてそれを晒す。一本の胸毛もないその空間には塗り立てのようなクリーム色が広がり、その双丘の頂いただきには仄かな桜色が添えられていた。

「あ……ウソ、だよな？」

それでも、俺の愚かな理性はあくまで理解を拒む。このような変化は別段不思議な話ではないとまだ足掻く。女性ホルモンの投与が行われていれば、時間こそかかるがこのようになることはあり得るのだ。となればこの変化は想定範囲ではないかと。そんなアホらしいことまだ言う理性は、最後の切り札に股へと手を伸ばしてしまふ。結果は、説明するまでもなかつた。いやそもそも、ここまで来て否定すること自体に意味がない。それでも最後の希望が潰えた俺には、もはや自分の力で立つこともままならなかつた。

「瑞鶴さん!？」

眼の前で顔を強ばらせる風雲。床にへたり込んだのだろう、彼女が上から覗き込んでくるのが分かる。俺は最後の精一杯を振り絞って、彼女に頼む。

「かぎ、ぐも。悪いんだけど」

「なんですか?」

「鏡……を見せて、くれない?」

そして、風雲が大慌てで取り出した鏡を覗き込んだ俺は。

これまで見てきた中で最も酷い顔をした、瑞鶴を見た。

こんな醜態を晒してもなお、俺を「瑞鶴」として扱ってくれる風雲には感謝しかない。

「とにかく、落ち着いてくださいね？　これ、お茶ですから」

「うん……ありがとう」

差し出された湯飲みを受け取り、そつと口につける。舌先に走る痛みに驚くと、風雲が「熱かったですか？」と聞いてくる。これが所謂「猫舌」というヤツなのかとは現実逃避。

とにかく説明を……いや、なにをどう説明すればいいのだろう。なに？　風雲は史実で活躍した公用船舶を元にした架空の存在でしかなくて、キミは本当は存在しないと言っても言うのか？　ちゃんと史実を元に丁寧に描かれた二次創作もあるけれど、多くの同人誌ではいいようにこねくり回されて結局対象年齢がつくような扱いをされていることを教えるのか？

そんなことをしてもどうにもならない。いや違うだろう？　俺がしたいのは単に、俺は瑞鶴じゃなくて「提督」であると説明したいだけ。ところが困ったことに、それを示す証拠はなに一つとしてないのである。

「別に……恥ずかしいことなんかじゃないですよ」

俺の沈黙をどう受け取ったのか、風雲はいう。

「だって私たち、艦船だったんですもん。そりゃあビックリしますよ」  
風雲は、俺が軍艦から艦娘になったショックで崩れたのだと勘違いしているらしかった。

「う、うん……そうだね」

だから、今は「そういうこと」にしておく。風雲には悪いけれど、今の俺が彼女に助けて貰うためには「瑞鶴」であり続ける必要がある。右も左も分からないこの場所で、彼女からも見捨てられるのは勘弁だった。

だからこそ、聞きたいことがある。どこに仕舞ってあったのかも知れない茶菓子差し出した駆逐艦娘に、私は聞く。

「あの子、風雲ちゃん……」

「なんですか？」

「この指き……提督さんは何処にいるの？」

指揮官、と言おうとして言葉を言い換える。瑞鶴ならば「提督さん」と言うことだろう。瑞鶴かんむすのフリなんて堪ったものじゃないが、俺がボロを出す可能性を考えれば、こういった細かな所まで演じきるしかない。

愚かだ、そう罵ってくれ。何を馬鹿なことを、と嘲ってくれ。だがそれでも、これが今の俺に取れる、唯一の生存戦略だった。

にも関わらず風雲は、こう言ったのだ。

「提督？　いえ……提督はここには居ませんよ？」

ていく。

誰かは、権利と義務はコインの表裏だと言う。牧場の家畜は自由ではないだろう。しかし牧場主に背かない限り、彼らの衣食住は保証されている。それが例え肥え太らされ、最後には誰かの食卓に並ぶ運命だとしても、種族としての生存は保証されている。

それは少なくとも、弱肉強食のルールに身を委ねるよりは安全なのだ。

「提督は、ここにはいませんよ？」

だけれどその希望は、目の前の駆逐艦娘「風雲」が打ち破ってしまった。「提督」はここにはいない。我ながらおかしな話だとは思う。俺が「提督」なんじゃないのか。毎日のようにパソコンを開き、その液晶の向こうでゆつくりと動く二次元に指示を出す。それが俺なんじゃないのか。

それなのに、今の俺ときたらどうだろう。細い身体に慎ましやかな胸、そして腰にまで届きそうな髪の毛を備えた女性……見る人が見ればこの身体が「艦隊これくしょん」に登場する艦娘である「瑞鶴」が髪を下ろした格好をしている。もちろん訳は分からない。ただ一つ明らかなのは、今の俺は俺ではない。それだけ。

だから、俺は期待してしまっただ。ここに「提督さん」が居てくれればいいと。俺のことを規定してくれる存在が居てくれればいいと。そうすれば、俺は自分のことを考えなくて済む。この世界をひっくり返したような混沌から、解放される。

「そっか、いないんだ」

だけれど一方で、俺は心底安心してもいた。良かった、ならまだ俺が誰かを決めつけるヤツは誰も居ない。提督がいれば俺のことを空母すいかくだとは思わないだろう。それはつまり、俺は誰でもない俺ではなく、画面の向こうにいる瑞鶴になっってしまう。

でも、俺は俺だ。俺は確かに現代日本で……つまり、世界でも五本

の指に入る経済大国で、世界で一番安全と言われる国で……とにかく、俺の知っている日本で俺として暮らしていた記憶がある。そして俺はブラウザゲーム「艦隊これくしょん」の提督<sup>プレイヤー</sup>。少なくとも、その記憶がある。

それなら、今の俺がしないといけないのは情報収集だ。ここが何処なのか、私が誰なのか、それを私自身で見いだして、規定しなくちゃいけない。

俺は本当に「瑞鶴」になってしまったのだろうか。俺が「提督」として知っている航空母艦瑞鶴で、例えば弓矢を艦載機として飛ばしたり、執務室を爆撃したりする瑞鶴なのだろうか。

確かめなければならぬことは沢山ある。だからこそ、俺は湧き上がる焦燥感を押さえ込む。下手なことを言っただけはいけない。目の前で私のことを不安げに覗き込む少女……「提督」としての俺の記憶が正しければ駆逐艦の「風雲」……は、今俺に協力的である唯一の、というか俺が目覚ましてから唯一会話の出来る存在だ。

だから怪しまれないよう……極めて妥当で、安全な質問をする。

「それじゃあさ、私たちの他には誰かいないの？　ここに居るのは瑞鶴と、あなただけ？」

「いえ、私以外にも艦隊の仲間が居ますよ。いまからそこにご案内しようと思つて」

そして俺のことを疑う素振りは微塵も見せず、真顔で答える風雲。その短い答え一つにすら、溢れんばかりの情報が含まれていることを彼女は知らない。

彼女は「艦隊」と言った。「艦隊これくしょん」というタイトルにも入っているくらいだから、艦隊というのは基本中の基本と言える単語だろう。ゲームに登場する艦娘たちは言うなれば昔の軍艦の生まれ変わりのようなもので、彼女たちが隊列を組むことで「艦隊」は完成する。

ということとはつまり、風雲のような艦<sup>キャラクター</sup>娘が他にも居る。ということに他ならない。

「……分かった。じゃあ、そこに案内して、ね？」

ぶつきらぼうになりそうで、慌てて語尾に「ね？」などとわざとらしく……某軽巡洋艦の真似ではない……つけてしまったが、それは俺が必死に感情を落ち着けている証拠でもあった。やはり、ここは「艦これ」の世界なのだ。今更かよと思うかも知れないが、これに興奮しない「提督」がいるだろうか？ 「艦これ」はゲームだから当然登場するキャラクターは全員美少女揃い。そして目の前の風雲も彼女に宛がわれている立ち絵イラストそっくりの姿で現れた。

つまり、他の仲間たちも同じような姿で……つまり、ゲーム同様の麗しい姿で現れるということ。今更ながら……これはすごいことだろう。画面の向こうにしか拝むことの出来なかった、まさしく空想上の美少女たちと実際に触れあうことが出来る。

そう。俺自身が瑞鶴になつていなければ、文句ナシで喜べる状況なのである……というか、普通は提督になるものじゃないのか？ 言いたいことは山ほどあるし、何一つ納得も出来ていないのだが……それでも、悪いことばかりじゃないのではないだろうか？

それに、こうなつてくると「提督」がいないのは俺にとって有利に働くだろう。ゲームにおいて提督プレイヤーの不在は鎮守府ゲームが活動しないことを意味する。それなら、わざわざ危険な海域に出撃させられたりすることはないだろう……というか、提督が居たら俺自身が中破したり大破したりする可能性があつたのか。瑞鶴の中破絵はなかなか際どいことになっていたので……今更ながら、提督が居て欲しい等と考えた自分を殴りたくなってくる。

……こうして冷静になつて考えてみると、状況はそんなに悪くはないのでは？ この状況を考えればもう会社に出社する意味はないだろうし、持ち帰り残業に苦しめられることもない。今の俺は瑞鶴なので、他の艦娘と触れあつても何ら不思議なことではない。

いやむしろ、瑞鶴という艦娘キャラクターを考えれば他の艦娘に積極的に話しかけていくくらいするだろう。護衛の駆逐艦や、頼もしい僚艦となる戦艦。そして先輩空母に後輩空母……さらには王道の姉妹艦翔鶴。とにかく絡めるキャラが沢山いるということになる。

なんなら、同性のよしみで触れあセクハラまがいのいっこすることだつて……！

なんだ、いいこと尽くめではないか。つまり俺は瑞鶴となったことでカッコカワイイ駆逐艦たちに守って貰ったり美人揃いの先輩空母へ生意気にも食って掛かったり、翔鶴のことを合法的に「翔鶴姉」と呼んだり、後輩空母から尊敬の眼差しを一身に受けたり……そんなあらゆる角度から見ても美味しいポジジョンを頂けるということに……。「あ、あの……瑞鶴さん？ どうしたんですか？」

しまった。風雲が俺のことを先ほどよりも心配そうな目で見ている。そりやさつきまでこの世の終わりみたいな顔してたヤツが涎を垂らし始めた。「ついに狂った」と思われてもおかしくないだろう。慌てて顔を拭くと、笑顔を取り繕う。

「ううん、なんでもない！ 仲間がいるって思ったら元気になっただけ！」

ウソは言っていないね。うん。

「そうですか？ よかったあ……それでは、皆の所に案内します！」

「みんなの居るところは、遠いの？」

「いえいえ、すぐ近くですよ」

風雲が、俺の前を歩いていく。提督プレイヤーに対しては比較的ラフな口調なので敬語の風雲は割と貴重。きつと瑞鶴このカラダとして生きていくうちに、そういう「貴重な場面」に俺は沢山遭遇することが出来るのだろう。

なるほど、何事もモノは考えようということ。これが「瑞鶴」として過ごす第二の人生として考えれば悪くはない。むしろ持ち帰り残業な日々よりもずっとマシ。惜しむらくは、俺が瑞鶴となってしまった以上は瑞鶴とは触れあえないことか。

……。

……いや。分かっている訳ではないのだ。今この状況がどれほど危機的か。場所も、立場も、何もかも分からない。知らない状

況で放り出されたのだ。まだ風雲や瑞鶴のことを知っている提督  
だったから良かったが、普通の一般人だったらこんな風にポジティブ  
シンキングすることも出来なかったに違いない。

だから考えるな。なるべく無心に、無心に風雲のスカートを見るの  
だ。それが今、この俺を落ち着けさせてくれる唯一の……。

……というか、風雲のスカートだけけど。意外と短いんですね。

案内してくれる風雲が一步一步を踏み出す度にその紫色のスカ  
トが揺れる。外面の向こうから見ている時は「夕雲型の制服は落ち着  
いた雰囲気があるなあ」なんて思っていたけれども、こうして間近に  
観ると……なんというか、想像以上に丈が短い。立ち絵だと決めポ  
ズ（必ずしもそうとは限らないが）で固定されているので、実際に動  
くとどうなるかなんて考えたこともなかった。

いやこれ、ただ単に比較対象がぜかましとかだからか？？ 確かに、  
艦これは曲がりなりに男性向けのゲームな訳で、当然男の浪漫に挑  
むモノだろう。そう考えれば夕雲型の制服がチラリズムを前提とし  
てデザインされているところは明らかなのである。

そんなことを考えながら木々を抜ける。これであの廃墟ともおさ  
らばと言うわけだ。そして抜けた先には————またしても廃墟。  
それも俺が目覚めた場所と同じようなコンクリート打ちっばなしの  
造り。

「……ねえ。ここじゃ、ないんだよね？」

「ええ、違います」

あつ、そうなのか。良かった。流石に廃墟から廃墟に移動して「こ  
こに仲間が」みたいなことを言われてしまっただけのホラーであ  
る。まあ、ゲームの世界に飛び込むという今の状況もなかなかホ  
ラーなのだが。

「というか、じゃあこの建物は……というか私が居たあの建物もそう  
だけどき、あれは何の建物なの？」

まさか理由もなく建てられた建築物なんてものはないだろう。そ  
れも一棟じゃなく、複数もある理由は？ それらが廃墟になったのは

何故？

そんな俺の疑問に、風雲は事もなげに答えてみせる。

「鎮守府の跡地らしいですよ」

「鎮守府の……跡地？」

跡地。そうか、だから提督さんはいないのか……納得している場合ではないのだろうか。それで説明はつく。

しかしそうになると、どうして俺はここにいるのだろうか。鎮守府がなければ「艦これ」はゲームとして成り立たない。なにせ鎮守府がなければ提督が着任する先がないわけで。

まあ、その意味ではだからこそ俺が俺の身代わりである「提督」に着任できず、瑞鶴になってしまったのでは……流石に仮説としては無理がある。憶測ではなにも分からない。

だからこそ俺は風雲に聞くのだ。艦娘とお喋り出来て一石二鳥！

とにかくそう考えて、情報を集めていかないといけない。

「どうして鎮守府だって分かったの？」

「飛龍さんが、そうだろうって言ったんです」

「……………へえ」

飛龍。飛龍か。予想外の方向で新しい情報が飛び出してきた。もちろん飛龍型一番艦の飛龍だろう。そういえば、風雲は飛龍の沈没したMI作戦で護衛役だったのだったか。風雲のリボンは飛龍の着物柄をモチーフとしていて、中々にエモイ設定なのだ聞いたことがある。

とはいえ、これは大きな収穫だ。飛龍がここにいるなら、それはつまり先輩として空母艦娘のイロハを教えて貰えるという展開が待っているに違いない。俺個人の嗜好としては瑞鶴の先輩は飛龍より加賀さんとかだと良いと思うのだが、まあ細かいことは言っても仕方のないことだろう。

「あ、飛龍さんだ！ ひりゅうさーん！」

と、風雲が駆け出す。廃墟の中に作られた獣道の向こうには、確かに橙色の着物が揺れていた。

「……………そういえば、飛龍のことってなんて呼べばいいんだ？」

あまり考えていなかったが、瑞鶴と飛龍に絡みは殆ど無い。まあ部隊が違うのだから当然なのだが。従って飛龍と瑞鶴がお互いをどう呼び合っているかは分からないのだ。

まあ、順当に先輩でいいだろう。ア○レンとかだと先輩呼びだったような気がするし。というかそれ以前に、何を話せばいいのだろうか。

「こんにちは、瑞鶴」

しかも向こうからいきなり話しかけてきた。これは困った。ええと、一応ここは瑞鶴として振る舞わないと。

「ええつと……飛龍、先輩？ 久しぶり？ ですな……？」

とにかく何事も会話から。手を挙げて……先輩相手に手を挙げるのは変な気がして途中でやめて、飛龍に近づいていく。

「……そこで、私は予想外の言葉を聞くことになったんです」

加賀さんは、私の話をずつとじつと黙って聞いてくれていた。その耳は私の一言一句を聞き逃さないようにしているのだろうけれど、視線は優しく私を守ってくれていた。

「……というか、いつまで触ってるんですか」

「別にいいじゃない。胸を揉んでるわけでもないのだし」

「もしそうしたら殴ってます」

そう返せば、そうとだけ素っ気なく返す加賀さん。それでも髪を梳く手が止まることはない。というか、多分……加賀さんは私の頭を撫で続けてくれている。

そうだ。分かってる。あの事を思い出す度に私の心は締め付けられる。飛龍先輩のこと、あの跡地のこと……その記憶に触れるのは、少しどころかどうしようもなく、怖い。

だからきつと、加賀さんから視ても怯えているのだろう。私は。

そしてそれを知って、それでも尚黙って私に寄り添ってくれる加賀

さんだから。

私は続きの言葉きおくに触れることができる。あの場所での出来事に、触れることができる。

「飛龍先輩は言ったんです——今は、平成何年なのか？ って」

飛龍先輩は、私てたちといと同じ存在くだった。

へいせい。

「今は、平成何年？」

平成——と、彼女は言った。それは俺、つまり現代日本で生きてきた俺にとっては聞き慣れた言葉。だが彼女にとってはどのようなだろう。飛龍は言うまでもなく艦娘で、しかも彼女の沈没は1942年、昭和17年のことである。平成なんて元号なんて知るはずがない。

……いや、どうなんだろうか。確かコンビニについて言及する艦娘も居たような気がするし、平成という単語を知っていてもおかしくないのかもしれない。

俺は風雲と眼を見合わせて……そして気付く。この反応を考えると、恐らく風雲は「平成」を知らない。というか先ほどのやりとりで考える限り、彼女は自分のことを「駆逐艦風雲」として……つまり、鋼鉄で形作られた軍艦フネの生まれ変わりとして認識しているようだった。

だから風雲は、艦娘は「平成」を知らない。とすると導き出される答えは？ 俺が彼女に対して放つべき言葉は、なんだ？

「え、つと……」

迷っていたのだと思う。きっと俺は、この時点で確信に近い何かを得ていたのだと思う。そしてその上で、言葉が切り出せなかった。なにせ俺は何も分からないのだ。ここは俺の暮らしていた日本ではない。俺の常識は通用しない。

どこかの漫画でも言っていた、会話で情報を得るときの鉄則。与える情報は最小限に、得る情報は最大限に。まだ向こうは「平成」という言葉しか使っていない。俺が本当に「艦これ」の世界にいるなら「平成」なんて言葉は出てくるだろうか。ではこの世界における「平成」とは？ 元号として使われているなら風雲の反応をどう説明する？

そんな答えのない迷いが、俺に次の言葉を躊躇わせる。飛龍はそんな俺をじつと見つめていたが、やがてふつと表情を緩めた。

「ごめん、変なこと言っちゃったね。今のは忘れて……」

「待ってー！」

遮る声に驚いて、数瞬経つてからそれが瑞鶴じぶんの声だと聞いて更にもう一度驚いた。なぜ俺は止めてしまったのだろう。だけれど、ここで誤魔化すことはしてはいけない。そうすれば一生後悔すると、そう何が、本能的に告げていた。

なぜかは分からない。もしかすると飛龍の表情や仕草に俺が「懐かしいモノ」を感じていたのかもしれないし、逆に「飛龍らしくない」と思ったのかもしれない。しかしこの時、俺はこの飛龍が俺の同胞どうるいなのではないかという、確信めいた感触を得ていたのだ。

いや、それとも——あの時の私はもう、飛龍先輩に宿った寂寥とも諦観とも取れる感情を感じ取ってしまったのかかもしれない。私からこれから覗き込むことになる深い深い深淵を、彼女に垣間見てしまっていたのかもしれない。

「今は、もう平成じゃないんです。今は、令和なんです」  
「……………そっか」

だから俺は、その時にさせる最も簡潔で、最も飛龍が欲しがっているであろう情報を提供した。

「令和……………それが、新しい時代の名前なんだね」

そして飛龍は、なんとも形容しがたい苦みを含んだ笑顔で、そう答えたのだった。

飛龍に案内された部屋は、これまでの廃墟とは一線を画していた。もちろん、コンクリート打ちっぱなしの冷たい建築物であることには変わりがないのだが……………。

「なんというか……………随分と散らかった？ 部屋なんですネ？」

疑問形になった理由は単純。散らかっているようには見えなかったからである。一見すると汚く見えるのだが、別に整理整頓がされていないようには見えない。埃は見当たらないし、置かれている様々な

ものだって……ああ、そうか。

「全部手作りだからね。まあ、汚いようにも見えらるだろうけれど」

「それでも、見る人が見れば文明だ！ 文明があるっ！ って興奮するレベルなんだよ？」とはこの部屋に私を連れ込んだ張本人の言。文明というのがどういうレベルを想定しているのかは分からないけれど、ひとまず目に付く限りで机や座椅子、ベッドらしきものは分かる。

「とりあえず座りなよ」

「えっと。じゃあ、お言葉に甘えて……」

促されるままに、俺は座椅子の一つに座ることに。とはいえ椅子と言っても実態は葉を敷き詰めたらしい何か背もたれっぽい何かを追加した謎の物体Xである。床にはゴザらしいものが引いてあるので、冷たいコンクリートに直接座るよりはずっとマシではあるのだけれど。

「改めて自己紹介……と言っても、私は飛龍としか名乗れないんだくれどさ」

飛龍としか名乗れない。その言葉が意味するところは明白であった。他ならぬ俺がそうなのだから間違いない。彼女も自身の本来の名前、つまり「提督」として「艦これ」をプレイしていたときの名前が分からないのだ。

「えっと、お、私の……」

「ああいいよ。風雲には人払いさせてあるし、それにあの子には何の話か分からないだろうから」

「じゃあ、風雲はやっぱり」

頷く飛龍。

「そうだよ。あの子は艦娘風雲でしかない」

「だから、風雲には「平成」の意味するところが分からなかったわけだ。

「それで、あなたの話なんだけれど……ああ、なんて呼んだら良いのかな？ あなたみたいな平成を知ってる艦娘ヒトに会うのは初めてだから」  
なんて呼ぶか、なんて。それを名前を喪がつてている俺こに聞くのか。も

ちろん答えるだけなら簡単だ。風雲は私のことを「瑞鶴」と呼んでい  
たし俺もこの身体が瑞鶴であると認識している。

にも関わらず……目の前の飛龍は俺が瑞鶴でないことを知った上  
で、俺に瑞鶴と名乗らせようとしているのである。

「好きに呼んで下さい」

「……まあ、確かに艦娘そのなまえの艦名で呼ばれたくない気持ちは分かるよ。  
それが自分のモノじゃないなら尚更ね」

でも。と飛龍は指を立てる。

「今の私は飛龍にしか見えないし、あなたは瑞鶴だ。違う？」

「……………あなたは、それでいいんですか？」

そうは言いながらも、俺だって分かっていない訳じゃない。目の前  
で話しているのはどうやったって飛龍なのだ。仮に彼女が「俺」とか  
「拙僧」とか言ったとしても「ああ、そういうキャラ付けなのね」とし  
か思わないに違いない。

そして全く同じ事は、この俺すいの身体かみにも言えるのだ。俺が何を言お  
うとこの身体かみが言ってしまうえばそれは瑞鶴の発言でしかない。風雲  
だってあの時、一目見ただけで俺のことを瑞鶴として認識していたで  
はないか。

今の俺は誰から見ても、瑞鶴なのである。

「もちろん、それでいいとは思ってないよ。だけれど、便宜上名前は必  
要だよ。それが偽であると、自分に言い聞かせ続けるしかないね」

飛龍の言い分は、確かにある意味では正しいのだろう。そしてそれ  
は、つい先ほども瑞鶴として生きても構わないとすら考えていた俺  
の痛いところを突いていた。俺は、本当にどうしたいんだろう。もう  
「瑞鶴」として第二の人生を楽しんでやろうとか考えていた矢先に「飛  
龍となった提督」と出会って、それで「瑞鶴」として見られたくなく  
なった？

「まあ、こればかりは時間が掛かることだと思っよう」

まるで見透かしたかのように飛龍が言う。

「あなたに、何が分かるんですか」

「わかるよ。だって今のあなたは、前の私と同じだ。ここはあなたが

思おうとしているような夢や妄想の世界じゃないし、ましてゲームの世界に迷い込んだ訳でもない」

俺の言い分を先回りするかのようには、言葉を並べる。

「だから、まずはこの現状を受け入れなさい」

そして、飛龍はイタズラっぽく笑ってみせるのだ。それが俺の緊張をほぐすためにやっているのは明らかで、表情は微妙に引き攣っている。それでも彼女は、笑っていた。

「安心して? 『平成』を知っているあなたは、私にとって貴重な客人よ。三食昼寝付きつてのは無理かも知れないけれど、できる限り助けてあげる。その代わり、あなたの知っている『令和』のことも教えて」  
「私……俺は、アナタの求めている情報は教えられないですよ」

「分かってないなあ、新元号が『令和』って分かっただけでも立派な情報なんだよ? ここに新聞や電波が届くと思う? 私はもうずっと

『元の世界』の情報に飢えてるの!」

ずずい、と（それは瑞鶴のための擬音だろう）飛龍が身を乗り出す。それこそ手を突いて、顔を突き出すように。飢えた狼とはこのことか。

「いや、そうは言われても……」

「なんでもするから!」

ん? いま何でもするって。そう言いかけて、俺は即座にその言葉を引つ込めた。

なにせその時、飛龍の手はまさに着物へと伸びようとしていたから。

「……なんでも、してあげるよ?」

「え、いや……ちよつと、飛龍サン?」

「だから、ね? お願い?」

状況を整理しよう。俺は飛龍サンの部屋に居る。そして飛龍サンは今、俺の目の前に顔をそれこそ押しつけんばかりに近づいてきており……そしてそこには、夢にまで見た艦娘の顔があった。

歪みのない輪郭線、ハリのある肌によよよと弾力感のあるほっぺた。そして瑞々しい唇。細められたまぶたの先に控える双眼は間違

いなく俺へと向けられていて……。

そんな捕食者が、すつと退いた。

「冗談よ。でも本気になったら言ってくれていいわよ?」

「いや、それこそ冗談ですよね……?」

正直に言えば、呑まれたのは事実。あのまま押し倒されてもおかし  
くはなかったし、もしかすると逆に俺が飛龍さんを押し倒していたか  
もしれない。

だけれど、そんなことはしただろうか。今の俺は瑞鶴で、空母が主  
砲など装備している筈もない。というよりここで何も出来なかった  
ことが、俺が俺でなくなってしまうたことの何よりの証拠だと思っ  
た。

だが、それを認めるわけにはいかない。こんなことを自慢するのは  
どうかと思うが、俺だって年単位で艦娘にいかがわしい眼を向けてき  
たのだ。

「というか飛龍さん、『提督』だったってことは元々男のヒトでしょう  
? 嫌ですよ男を抱くなんて」

そう。流石に俺も男を襲ったりするつもりはない。仮に俺も外見  
が瑞鶴おんなだとしても、中身は男、向こうだってそうなのだ。それではホ  
モではないか。

「……」

しかし飛龍は無言。無言のままに俺へと微笑みかける。あれ、違っ  
た……? もしかして比較的珍しいとされる女性提督さんだったり  
した? 一瞬背筋に冷たいモノが走ったが、当の飛龍といえば口元を  
緩めてこちらを見ていた。

「さて? どうだろうねえ?」

コイツ、楽しんでやがる。

「……ちよつと、それは言ってくれてもいいじゃないですか」

「えー、どうしようかなあ。性別を聞かれるとかセクハラだしなあ  
」

「ちなみに俺は男です。はい言った! 飛龍さんも言っておさい!!  
言わないのは不公平ですよ!!!」

「わあせーい」

口に手を当てて見せても無駄。というかそもそも、統計的にどう考えたって男性提督の方が多いのだ。訳の分からない廃墟で出会った「提督」が女性なんて、月食か日食が起こるくらいに珍しい話だ。

「男よ、男。外見は巨乳のお姉さんだけどね」

「ほらやっぱり！ やっぱりそうだった性別詐称！」

「医学的にはおかしな事はいつてないでしょ？」

そうは言っても、この飛龍もなかなか凄いくことをしてくるものだ。中身が男なのに身体でアピール？ 無理無理、そんなことが簡単に出来るわけがない。もちろん元の世界でコスプレやらなんやらをしていたなら話は別だろうが、普通に考ええてそんなことはないわけだ。

「まあまあ。とりあえず飛龍<sup>わたし</sup>の秘密も明らかになったところで、とりあえず瑞鶴ちゃんは着替えよっか」

「……なんでちゃん付けなんですか」

それで意趣返しでもしたつもりなのだろうか。ところが抗議しようとした俺の声は、飛龍が取り出した「あるモノ」で凍り付くことになる。

「はい、これ」

「え、それって……」

取り出されたのは、ゲームでも見慣れた……あの中破すると殆ど全部吹き飛ぶ『着替え』。

「病衣じゃいろいろ不便でしょ？ まずは形から入って……」

違う、俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「飛龍さん、その衣装……どこから出したんですか？」

なんで持っている。そりゃもちろん、目覚めて自分が瑞鶴だと気付いた時から思っていた疑問。

なぜ、俺は病院の服なんて着ていたのか？ そしてなぜ飛龍は、俺の着ている服が病衣だと、そしてなにより、瑞鶴<sup>おれ</sup>の着るべき服を持っていたのか？

そして飛龍は、その俺の疑問に事も無げに答えてみせるのであつ

た。  
「ど·こ·っ·て·…·あ·な·た·を·建·造·し·た·時·に·現·れ·た·ん·だ·よ」

けんぞう。

建造。建物や船、そのような大きな構造物を作ること。つまり、ずいかく軍艦を作ること。

「俺を……建造した？」

「ええ、そうよ」

そして飛龍は、そんなことを事も無げに認める。俺の視線に気付いても尚。

「言いたいことは分かるわよ。でも言ったでしょ、まずは受け入れなさい」

そう言いながら、飛龍は俺にぐいと服を押しつける。それは紛れもない「瑞鶴」の服。これを着てしまったなら、俺はどこからどう見ても瑞鶴になる。

そこには、紅白が控えていた。真っ白な道着に真っ赤な袴……というかスカート。

「これを着ろって、いうんですか」

「ええ。そうよ」

そしてその上に載せられた、下着。

「……………紐パンは、なんとかありませんか」

「そこら辺の葉っぱでいいなら、良いわよ」

まあ、そうなるな（諦観）。

「勘違いしないで欲しいのは、私は別にあなたの敵ではないわよ」

「それは……まあ、分かりますけれど」

飛龍が瑞鶴おれと同じ立場なのは分かっている。というか、もしも俺をこの訳の分からない場所に艦娘おれでないの瑞鶴として呼び出したのが飛龍な

ら、その事実を隠そうとするだろう。少なくとも、そちらの方が都合がいい。

「あなたの目覚めた場所。もうどんな場所かは目星がついてるでしょ？」

「艦娘を建造する場所……『工廠』って訳ですか」

そ、大正解。飛龍が示す先には、私が目を覚ました廃墟。風雲は「鎮守府の跡地」という風に言っていたのは、本当のことだったらしい。

「もちろん、出来るのは建造だけじゃないわ。装備開発も出来るし、解体だって」

「ゲームと同じようにって、ことですか」

無言で頷く飛龍。それでは、これまで見てきたいくつもの廃墟は、それぞれ鎮守府の機能を持っているということになるのだろう。そしてそれらは——今でも機能している。

「あそこで、あなたはもうずっと眠っていたの」

「……眠っていた？」

「ええ、眠っていたわ。ずっと、あそこでね」

もちろん、それは俺の記憶で言うならば「偽」である。なにせ俺は昨日の夜、持ち帰り残業していたのだ。もちろん、あれが昨日の夜ではなく、実は何年も前のことだと考えれば……例えば、あの夜に俺はUFOか何かに攫われて、そこで肉体改造を施されたとか？ つまるところ、UFOも「艦これ」を知っていたと？

「多分、あなたが考えるほど難しい話じゃないわよ」

「……え？」

なんだ。俺の考えていることが分かるのか？ そんな疑問を向ける俺に、飛龍さんは笑いながら言う。

「そらそうでしょ。だって、いきなり目覚めたら艦娘になつてた？」

馬鹿らしい。そんなことがあるわけないって、誰しも思う。けれどね、ここが本当に『艦これ』というゲームだと考えてごらん？ 私たち提督プレイヤーは何の予兆もなく、鎮守府に着任する」

「じゃあ何ですか。俺が瑞鶴に着任したと？」

「少なくとも、私が年単位で考えて得た仮説はそれよ」

年単位。その言葉はするりと出たけれど、俺の中にはずしりと落ちる。年、年単位で飛龍として過ごしてきたというのかこの人は。

いや、この人は「令和」を知らなかったのだ。それも当然……それは当然のこと。

俺は飛龍を見る。彼女は、真つ平らな表情で俺を見返していた。

「同情しなくていいわよ。私は何も手を打てなかった。このまま状況が解決しなければ……どうせあなたも、同じ運命」

「その原因を作ったのは、あなたなんじゃないですか？」

口について出たのは、俺にとっては当然の言葉。

「あなたが、俺を……瑞鶴を建造しなければ、俺がここに着任することはないかったんじゃないですか？」

「……誰が『着任』しようと、今日まで瑞鶴は目を覚まさなかった。私にとつては、それだけのこと」

「だったら……なんで瑞鶴おれを建造しようとしたんですか！」

「分からないの？ 私が提督だからよ。提督なら、艦隊を強化するために艦娘を建造する。それが提督のやるべき事デイリークエストでしょ？」

そこには、何の迷いもない表情の飛龍ていとくがいた。当然のことを当然のこととして行う、提督が。

「じゃあ、他にも私みたいな艦娘ヒトがいるんですか？」

「提督は艦隊を強化するために建造するのよ？ 目覚めない艦娘なんて要ると思う？ それにそもそも、この世界には『任務』とかないし、資源も自然回復しないし……」

ということとは、建造されたのは私だけ。それ以降は建造していない……と。

「一発で『瑞鶴』を引き当てるなんて、恐ろしい強運ですね」

「まあね、なにせ今の私は運40の飛龍だし？」

そしてそれは、俺にとつての不運であった。この不仕合わせを一体誰に嘆けばよいのだろうか。

飛龍に対して？ ありえない。ここで飛龍との関係を拗らせることは悪手でしかないし、そもそも飛龍も俺と同じ境遇なのだ。

瑞鶴このからだに対して？ それも違う。これは建造されて、そして俺が着任するのを待っていただけの存在だ。八つ当たりにもならない。

じゃあ、この世界か。この世界に対してか？ 俺が瑞鶴になつてしまったのも、俺が俺の本来の名前を喪つたのも、世界のせいだと？ 一時の感情であつたなら世界を恨んだかもしれない。

けれど現にこうして、俺は瑞鶴として存在している。紅白の衣装に身を包んだ俺のことを、一晩前までPC前で艦隊ゲームを指揮をしていた提督だとは誰も思わないだろう。もしくはこれが現実でいうところのコミケとかのサブカルな場所だったら、神コスプレとか言われてカメラに囲まれていたのかもしれないが……。

「俺に、どうしろって言うんですか」

「私は慣れるとしか言わないし、言えないわ」

私だって、どうすればいいのかわからないのよと飛龍は言う。

では、俺は一体どうしたいのだろう。そんなことを考える間にも俺は呼吸をしている。呼吸は瑞鶴おれの小さな胸を上下させて、不慣れな俺が巻いたサラシを上下させる。膝よりも短いスカートはふとももを撫でる風すらも防いでくれず、急所だけを守るように股下にぴったりと張り付いた下着は嫌でも股間の喪失感を意識させる。

それが、今の俺だ。瑞鶴となつてしまった、今の俺。

「……『解体』してみろ？」

飛龍が、そんなことを言った。

「まだ試していない工廠の機能。装備の開発発と廃棄はキチンと動いたわ。建造も、あなたが着任したことで曲がりなりにも成功した。それなら『解体』だって出来るんじゃない？」

「……なにを」

いや、何を言ってるのかは分かっている。解体を、瑞鶴おれを解体してみようと言っているのだ。

「ほら、『艦娘が解体されるとどうなるのか？』って艦これのサービス初期からずっと提督わたしらが疑問に思っていることじゃない」

「……確か、普通の女の子に戻るんですけどっけ？」

もちろん、それでは何も解決しない。ところが飛龍さんは首をぶんと振る。

「いやいやないない。それはないよ瑞鶴ちゃん。あれは運営のリップサービスってヤツでしょ。そもそも軍艦の処分方法って知ってる？

解体処分っていうのは、艦体を全部バラして屑鉄として再利用することなのよ？」

「じゃあなんですか。私に自死しねと？」

それがどれほどの意味を持つのか、この飛龍は分かって言っているのだろうか。

「ええ、有り体に言えばそうよ。そうすればこの世界から逃げられる」「逃げられなかったら？ 俺が単なる女の子になったとしたら？」

「それでもいいじゃない。あなたが『男だった』という意識を失えば、あなたが自分の肉体そのカラダに違和感を抱くことはなくなるはずよね？ それはあなたにとっての——」

「ふざけないで下さい！」

気付けば、俺は叫んでいた。叫んでから、なんで叫んでいるのか分からなくなつた。

「俺は、俺は……」

「悪い選択じゃないと思うわよ？ 解体装置の起動には提督がいないと出来ないから、私は今日まで試せたことがないけれど」

そんなことは知つたことじゃない。俺に死ねと提案する、この人はなんなんだ。そしてこの人に抗議している俺はなんなんだ。

「それでああなたは良いんですか？ 折角着任した瑞鶴くうぼなのに」

「戦力にならないならしょうがないじゃない。ほら二次創作でよくあるじゃない、役立たずの艦娘を処分する感じの話」

「それは、二次創作ものがたりの話でしょう？」

「でも、今の私たちはゲームものがたりの中だよ。作り物の、誰かが誰かのために作った登場人物キャラクターに押し込められている」

飛龍の言うことは、間違つてはいない。俺は確かに瑞鶴で、目の前にいる飛龍は明らかに飛龍なのだ。それを否定することが出来ない時点で、ここはゲームに限りなく近い世界。

だけれどそれが、ゲームと同じこと……解体を許容する理由になるとは思えない。

「無理することはないわよ。建造をして、瑞鶴が現れたとき、私も『どお〜よっ！』って喜んだモノよ。でも、目覚めない時間がどんどん伸びていって、入渠ドックに押し込んでも何の反応も示さなくて。それでようやく、私が目覚めたときの状況に気付いたの」

俺はなんにも言わずに、飛龍の話に耳を傾けていた。飛龍は淡々と語る。

「私も同じような、誰も居ない廃墟で目覚めたんだって……要するに、私がある今の状況を作ってしまったって事は、変わらないのよ。だから、私が責任をもって解体ころしてしてあげる」

「……なんで、そういう話になるんですか」

「そういう話にならざるを得ないじゃない。私はあなたに責任がある」

飛龍の言わんとすることは、分からない訳ではない。だけれどそれは、先ほどの正当化とは真逆のこと。俺が言葉選びに悩んでいると、彼女は言った。

「認めなさい。自分は生きたいんだって。こんな状況になっても、自分を喪つても尚、生きていたんだ、って……それが嫌なら、私があるを殺してあげる」

それを、俺にここで認めろと。

「まるで脅迫ですね」

「じゃあ言い方を変えよつか？ 『カワイイ女の子になって楽しい鎮守府ライフ！ いまなら指南役として頼りになる先輩空母がついてくるー！』」

「……頼りになる先輩空母って、もしかしてあなたですか？」

「あつたり前じゃない！ 若くてピチピチ！ しかもモデル顔負けの美女飛龍ちゃんよ？」

「……………」

なんだこれは。なんなんだこのVサインを片手にウザったい笑顔を浮かべる艦娘おんなは。これが俺の先輩？

「悪くないでしょ？ どう？」

「……………」

「んー。じゃあ実行使だね」

押し黙った俺に、飛龍は手を伸ばす。そして俺の腕を掴むと……手のひらを胸に押し当てた。もちろん瑞鶴おれのないに等しい胸ではなくて、飛龍の大きなお餅に。

「な……………」

「あれ？ 顔が真っ赤になってるねえ？」

「あわ、あわわわわわわ……」

そこには。まあなんとというか。とてもふくよかな感触が広がっていた。よく胸をマシユマロかなにかに例えるのは聞いたことがあるけれど、布越しでも、こんなに凄いのか。

「ま。そゆことだよ」

「どーゆーことですかっ!!」

「生きてりやまた胸が揉める」

「はあっ?!?!? 俺をエロ親父みたいに言うの止めて貰えます?!?!?」

慌てて腕を引っ込めると、飛龍はその胸を張って真面目な顔で言うのだ。

「でも世界の真理だよ？ おっぱいは全てを解決する」

「しませんっ!」

「でも、もしここで私が『飛龍先輩って呼んでくれたらおっぱいを揉ませてあげる』って言ったら？」

……………。

……………。

……………。

「…………飛龍、先輩」

「よし。じゃあ頑張って生きてこー！ おー！」

せいかつ。

「え？ 待って下さい、これ何ですか？」

「見て分からない？ 愛しの先輩が作ってくれた豪華な朝食だよ？」

「いやいやいや……」

これは、いくら何でもおかしいだろう。なにせ俺の目の前には文字通りの「朝食」があるのだ。焼き鮭に納豆、豆腐に味噌汁……ひっくり返された茶碗にはお櫃に納められた白米が入るに違いない。

「飛龍先輩、ここは廃墟ですよね？」

「うん。まあ放棄された鎮守府だと思うよ。私の予想でしかないけれど」

「私が寝てた部屋とか、先輩の部屋とかはコンクリ打ちっぱなしでしたよね」

「艦娘の居室ね。ガラスも割れてないし、建設中に棄てられたんじゃないかな？」

「とにかく、今は俺たち以外に誰も住んでない。ですよね？」

「うん」

「つまり廃墟。ここまでは合ってます？」

「うん。合ってるね」

頷く飛龍。それはつまり、目の前の光景がいかに常軌を逸しているかを示している。

「この廃墟の中で、どうしてこんな普通の朝食が出てくるんですか？」

「簡単なことだよ瑞鶴ちゃん。ここが『執務室』だからさ！」

果たして、それは簡単なことなのだろうか。いや、ここが「執務室」なのは俺だって理解している。なにせ壁紙に床、椅子、机、窓枠、装飾、家具……とにかく「艦これ」における「母港画面」におけるそれらの配置が同じなのだ。唯一例外をあげるなら、窓枠の向こうに見える景色が整備された岸壁やクレーンではなく、自然の生命力溢れる（穏やかな表現）入り江だということくらい。

「いや、でも。母港画面の食事は単なる絵で」

「まーま、百聞は一見にしかず。万の文字より一瞬の体験だよ！」

俺の話を聞くつもりなどないのだろう。飛龍はそのまま茶碗を手  
に取ると、ぱぱつとご飯をよそつてしまう。不思議なことに、いつ炊  
かれたとも分らない白米はホカホカと湯気を立てていた。

「……」

これ、食べられるのか？ 止めた方がいいのではないだろうか。世  
の中には展示用食品サンプルみたいな存在もあるのだ。いくらツヤ  
ツヤで、それどころか湯気まで立てていたとしても、こんなモノを食  
べてはイロイロとマズいのではないだろうか。

「それじゃあ両手をあわせて、いただき……」

「先輩！ ちよつと、ちよつと待って貰えませんか!？」

「……なによ出し抜けに、ご飯冷めちゃうわよ?」

呆れ顔の飛龍。呆れたいのはむしろコツチである。

「まさかとは思いますがけれど、こんなの毎日食べてるんですか?」

「ヒトの料理にこんなのは失礼な」

「だって飛龍先輩が作ったわけじゃないんでしょ、さつき作ってるつ  
て言ったくせに」

「あーいや、まあ、ウソは良くなかったね。でもあれは一種のドッキリ  
というか」

「そのドッキリで食中毒とかになったらマズいから止めたんです!」  
考えてもみて欲しい。母港画面で表示されるのは単なる絵である。  
しかも描かれたそれはいつまで経っても変わることのない絵である。  
それはつまり、調理されてからずっと放置されているのと同じである  
……しかし、何も変わっていないということは劣化もしていないとい  
うことではないだろうか?

「まーま。いいから食べてみなよ」

「……じゃあ、まあ。いただきます」

まあ。流石に一口でお腹を下したりはしないだろう。そう思いな  
がら箸に手を伸ばす。もちろん一番始めに食べるのは白米だ。  
野菜から先に食べるなんて言うヒトもいるけれど。やはり白米は日  
本人の精神的支柱である。

「はむっ………んッ!!」

その瞬間。息が詰まる。身の毛がよだつとはこのことか。身体中の細胞が沸騰したように騒ぎ、胸が詰まる。本能的に吐き出した米粒たちは、真っ黒になって崩れてゆく。

「あー……ダメだったか」

「げほっ、げほっ……な、なんですかつ、これ……」

視界がぼやける。目元を拭っても直らない歪んだ世界の中で、唯一歪んでいない飛龍が俺のことを見下ろしている。

「なについて、重油だよ。軍艦が油で動いてるのは知ってるでしょ？」

「そん、な……」

部屋が、先ほどまでと姿を変えていた。まるで蜃気楼のように姿を変えてしまったそこは、廃墟の本来あるべき姿。コンクリート打ちっぱなしの部屋。食卓机の代わりに鎮座しているのは、緑色に塗られたドラム缶。

「認識の齟齬を使えば瑞鶴ちゃんにも美味しく食べて貰えると思ったんだけれど。流石に無理だったか」

「なんで……」

何故、何故こんなにヒドい仕打ちをするんだ。さっきまで少しでも普通の食事が食べられると思っていた俺が馬鹿みたいじゃないか。

「さあ、飲むのよ瑞鶴ちゃん。そうしないと艦娘は生きていられないんだから」  
わたしたち

ドロリと粘性を持った液体を手で掬った飛龍が、それを俺に近づけてくる。指の隙間から流れ落ちる真っ黒な油。

「やつ、やめ」

「だめ。飲むの」

油のついた手で顔をわしづかみにされる。燃料を私の口へ流し込もうとする飛龍の表情は、無感情そのもので――。

「やつ、やめッ！」

「!!」

そこには、天井があつた。飛龍の姿も、ドラム缶も。そこにはない。つまり……。

「……夢、か」

覚醒は次第にゆっくり、けれども俺にとつては突然に訪れる。なぜなら意識が蘇った瞬間こそが覚醒の時であつて、それ以前に身体が行う手順を知覚することは出来ないからだ。

そして覚醒と睡眠は、何度も訪れる生と死のサイクルでもある。もしかすると二度と蘇らなかつたかもしれない神経が繋がりをづくり、俺は次第に自分の四肢を己のモノへと変えてゆく。例えそれが偽りの身体であつたとしても……偽りの身体？

そういえば、今は何時だ？ 霞がかかつた思考が徐々に鮮明になつていく。昨日は確か、持ち帰り残業をしていて、今日がその提出期限。あれ、違う、それは昨日じゃなくて、一昨日の話。それなら提出の期日は今日ではなく昨日。

そんな記憶から紡ぎ出された事実が頭の中に並んでいく。持ち帰り残業が完成した記憶が無い。なにせ俺は「艦これ」をプレイして……あれ、朝？ 仕事は？ というか、今日が昨日なら、提出期日をとつくに過ぎているということにならないか？

「やばッ……!?!」

飛び起きて、それからふと我に返る。目の前に広がっているのは俺の部屋じゃない。あの残業と、晩ご飯のコンビ二飯と、そして紙くずで中途半端に汚い机や、読みっぱなしの本やらが落ちて重なり合つたフローリングもない。

そこにはただ、打ちっぱなしのコンクリートで四方を囲まれた空間が広がっていた。

「あ、そうか」

喉から出る声は細くて高い。それが骨を通じて鼓膜を揺らし、俺の現状を否応なく認識させる。窓から差し込む光は、まだ朝になつたばかりであることを主張していた。

そんな時にふと感じる、股下の少し上が張るような感覚。反射的に力を込めようとして、昨晚のことを思い出す。先輩が言うには、女性の方が堪える力が弱いんだとかなんとか……先輩？

ああ、そうだ。そうだった。ベッドから立ち上がりトイレ——厳密には、トイレとして扱おうと決められた部屋——へと歩きながら思い出す。そうだ、ここは鎮守府の跡地（仮）。俺は先輩の主催した「新人歓迎会」という日本の悪癖でしこたま吞まされて……いや、そんなことを思い返している場合ではない。いつもとは勝手が違うのだ。

辿り着いたトイレで、俺は廃棄用に置かれた缶の上に跨がる。コンクリート打ちっぱなしの部屋では滴が缶を打つ音がよく響く。響いてしまう。

それから目を逸らそうとして、ふと。鏡と目が合った。

……いや、恐らく私はあの時、意図的に鏡を見たのだ。

ああ、やつぱり。と、どうしようもない現実を受け入れるために。

「……夢じゃないんだ」

そこには、顔を引き攣らせた俺——艦娘「瑞鶴」の姿があつた。

「え？ 待って下さい、これ何ですか？」

「見て分からない？ 愛しの先輩が作ってくれた豪華な朝食だよ？」

「いやいやいや……」

訳が分からない。いや、あの悪夢よりは遙かにマシなのかも知れないが。

「これを朝食って呼ぶんですか？」

「うわー、そういうこと言っちゃうんだ瑞鶴ちゃん。折角私たちが朝から頑張つて集めてきたのになー。ねえ風雲？」

「えっ？ あっはい！ そうですな飛龍さん！」

突然同意を求められて、慌てたように同意する風雲。ほら、困つてますよ。そして風雲の隣に、もう一人の影。あれは……。

「そういうえば、瑞鶴ちゃんにはまだ紹介してなかったね。こっちは巻

雲」

まあ、知ってるとは思いますが。そんな飛龍の声を聞きながら、俺はその艦娘を見る。風雲とお揃いの制服を着て、クリーム色の髪の毛と眼鏡が特徴の巻雲。無印の立ち絵イラストにおけるチャーミングポイントであつた萌え袖は……流石に捲っているよう。

「あ、どうも」

私が会釈すると、向こうも無言で頭を下げる。もつとガツガツくるかと思つたけれど、以外と礼儀正しいのだろうか……？ そんなことを考えていると、彼女はぷいと眼を逸らして飛龍の背中に回つた。

「ああ、気にしないで。この子、ちよつと人見知りなだけだから」

なるほど。艦娘にも個体差がある。瑞鶴おれがゲームの瑞鶴と同じじゃないように、巻雲もまた型にはめた性格をしている訳ではないということだ。

そんなことよりも問題なのは……。

「それで先輩。これは何なんですか」

「いやだから、朝食。あさごはん、ブレックファースト。わかる？」

そう言つて飛龍が指し示すのは、黒い山。それもただの山ではない。積み上げられたイ級の山。

まさか、これを喰えと?? この不気味でグロテスクな、未知の敵生物エネミーを?? それは今朝の悪夢よりヒドい朝食ではないだろうか。

というか、こんなのを喰らうくらいならまだ原油を飲み干した方が――

――いや、原油は無理だな。無理。

「よし、じゃあ始めるぞー。はい瑞鶴ちゃん、これ！」

もちろん、先輩面の飛龍は俺の考えていることを慮ることもなく話を進めていく。手渡されたのは、一振りの鉈なた。それはもう、黒光りする腕とか切れちやいそうなサイズの鉈だ。

「え? スプラッター映画の撮影ですか??」

「あはは、面白いこというね。違うよ」

興味もなさそうにバツサリ斬り捨てる飛龍。いや扱い雑じゃありません? 気に掛ける様子もなく飛龍は手に持った鉈をイ級めがけて振り下ろす。ぶしゃつと変な音がして、すうと下腹部が切り開かれ

ていく。するとそこから、ドサドサと黒いモノが流れ出てきた。

「うわ……」

「うーん。今日のは微妙だなあ」

腕を組みながら飛龍がそんなことを言う。微妙？ 今日のは？  
つまり、飛龍たちはいつもこんなことをしているのか。

「ゲームではどうだが知らないけれど、深海棲艦は船やらなんやらを襲ってるみたいなんだよね。で、たまにお腹から缶詰とかが出てくる」

「へ、へえ……え、じゃあ朝食って？」

飛龍の顔を見つめると、ご名答と言わんばかりにニコリとする飛龍。マジか。

「飛龍さーん！ こつちに魚がいますよ、しかも生きてます！」

「お！ 大当たりじゃん！」

やったねとばかりに駆け寄っていく飛龍。駆逐イ級なんて、提督<sup>おれ</sup>にとつては雑魚キャラの一つでしかない。強いて言えば戦艦の攻撃が吸われることで嫌気が差すことはあるが、それは単にゲームの進行が上手くいっていないだけでイ級にイライラしている訳ではない。

それに対してここはどうだ。黙々と鉦を振るう巻雲、魚を選別する風雲。そしてイ級の装甲を引き剥がす飛龍。

「ここではね、敵も等しく資源なのよ。任務<sup>クエスト</sup>もなければ資源の自然回復もない。だから、私らは自給自足でやってくしかないってわけ」

ほら手伝って！ そんなことを言う飛龍。自給自足という言葉に、私はもう一つの事実を受け入れざるを得ないのだと。

「飛龍さん」

「ん？」

ようやく気付いた………というか、諦めがついたのだ。私が受け入れないといけないのは、何も自分の身体の前だけではなかったのだと、そう、諦めたのだ。

「ここって、本国から孤立しているんですね」

「それどころか、本国<sup>にほん</sup>があるかどうかすらも分かってないんだよ」

しんえん。

「結論から言うと、日本らしいものは存在するわ」

「さつき存在するかも分からないって言ってたじゃ無いですか」

まあね、と俺のツツコミをさらりと流して飛龍は進んでいく。鎮守府の廃墟は空襲でも想定しているのか、底へ底へと、何処までも続いている。

「さて、と」

その言葉と共に、ペかりと点けられる懐中電灯……いや、あれは探照灯か。ん？ 探照灯？

「飛龍先輩、それって探照灯ですか？」

「ん。ああ、そうだよ。だって装備してるでしょ？」

「え……ああ……あれ？」

いや、それは違う。航空母艦に探照灯は装備できないはずだ。そもそも、航空機や夜間要員などの補助機材を積むべきスロットばしょに、そんな役に立たないモノを装備することはないはずだ。その事を指摘すると、飛龍は背中で答える。

「いや、艦これの話じゃなくてね？ 航空母艦飛龍の話」

「ああ、そちらの方ですか」

確かに、探照灯は配備サーチライトされていない船艇なんてないだろう。

「私たちは軍艦かんむすだからね。使おうと思えば使えるよ……まあ、使わないにこしたことはないけれどね」

「使わない方がいい？」

それに対して何も返さず、飛龍は廊下の突き当たりで立ち止まる。

探照灯の反射光で形作られた背中がペコリと下げられた。

「瑞鶴ちゃん。失礼のないようにね」

飛龍の開いた扉の先は、何かの展示室のようだった。飛龍は手元から何かを取り出すと、それを何処にかざして……途端に部屋がぼうつと照らされる。ランタンか何かに灯りを点けたらしい。

「これは……」

「ああいう敵から回収したモノ達」

そこには、床に壁に所狭しと並べられた物体の山であった。形に見覚えのあるモノもあれば、何に使うかさっぱり検討が見当が付かないような物まである。

そしてそれは、ランタンの光で見通せないほど遠くまで続いていた。

「これ、全部イ級とかのお腹から出てきたんですか……？」

「まあね。イ級だけではないけれど」

「というかこれ……」

どうみても、遺品ですよ？ とは、流石に聞けなかった。

というか、どう考えてもそうではないだろうか。だってここ腕時計とかありますよ。まさか海の真ん中で腕時計がどんぶらこと流れてくるハズもなく。

『瑞鶴ちゃん。失礼のないようにね』

だから飛龍はあんなことを言ったのか。

「イ級が商船を襲い、その戦利品を飲み込む。私たちがイ級を殺して、腹の中から缶詰やら魚を回収する。私たちのやってることは、追い剥ぎと同じだからね」

そう言いながら誰にでもなく手を合わせる飛龍。そこには、これまでに積み上げられた時間と、喪われた存在いのちがあつた。

「感傷に浸ってる暇はないわよ。読み取れることが沢山あるの、ほら、これを見て」

そう言いながら飛龍が指差した先には、赤と白の救命浮輪。

「英語が書いてあるわよね。これが船名で、こっちが……」

そう解説していく飛龍は、冷静そのもの。どうして彼女はこんなに冷静に事実を並べられるのだろう。さも当然というように、1個1個の遺品を確認していく。

「……」

「なんて顔してんのよ。まあ、言いたいことは分かるけれども」

それなら、俺が黙っていた理由も分かるはずだ。別に遺品を漁ることとに文句があるわけじゃない。生きる上でイ級の腹を開くのは当然

のことだろうし、そこで回収した遺品にもきちんと配慮していることは分かる。

そして、そういった遺品を利用してでも生き抜こうとしていることも。

「……で、まあ。これらの情報を統合するところはショートランド泊地、そして英国系の……まあ恐らく豪州軍オーストラリアだろうけれど、そこら辺の軍隊は抵抗を続けてるって事が分かるわけ」  
「なるほど……」

となると、ここは日本から遠く離れた場所で、周辺で戦っているのは英語圏の軍隊だけということか。

「あちなみに、今朝のイ級アレは泊地周辺の掃海活動も兼ねてるから」  
「ああ……まあ、そんな気はしました」

流星に、滅多に入っていないだろう缶詰のためにイ級を狩っているとは思わない。あの時の飛龍は冗談っぽく朝食などと言っていたが、要するに敵を倒し続けないと危険なのだ、この泊地も。

一体、この海はどうなっているのだろう。まあ艦これの「設定」は人類が制海権を失った世界と言っていたし、そのようなものだとわかってしまえばそうなのだろうけれど。

「……じゃあ、日本らしいものがあるっていうのは？」  
「日本語が書かれたモノがいくつかあるのよ。そこまで多い訳じゃないけれど」

まあ、ここら辺は日本からの海流が流れてくるわけじゃないしね。そんなことを言いながら飛龍はランタンの光の向こう、闇に包まれた倉庫の奥果てを見据える。

「多分、日本近海を荒らした後にこっちにやって来たんだろうね。どいう関連性があるかは分からないけれど、少なくとも日本語は存在する」

「……なる、ほど」

つまり、それはなんの意味もない情報ということか。日本語が書いてあるものなら日本でなくても存在するだろう。それで飛龍は「らしいもの」と表現を濁したのだ。

「ところでさ。瑞鶴ちゃん」

「なんです？」

「あなたのサーバーって何処だった？　これがショートランド泊地だったら話は早いんだけど」

「え、えーと……」

どうだっただろう。艦これには幾つかのサーバーがあつて、それぞれの中で演習と呼ばれる艦隊戦や戦果の順位などを競うことが出来るようになってる。サーバーの名前は横須賀鎮守府に始まり国内基地から海外の泊地まで……とにかくあちらこちらの実在した基地をモデルとしているのだ。

とはいえ、実際に泊地を意識することはない。なにせゲームスタート画面で端に小さく出てくるだけだし、俺は別にランカーなどをやっていたわけではないし。

そして、この質問がどれほど重要なのかも分かっているつもりだ。つまり飛龍は、瑞鶴おれと飛龍が同じサーバーに所属する「提督」だったから同じように艦娘になったのではないかと考えているのである。「たぶん、ラバウルだと思います。ちよつと自信ないですけど」

「そっか。なら、やっぱりサーバーは関係ないのかな」

まあ。そこら辺はあんまり重要じゃないとは思うけれど。そんなことを言いながら飛龍は考え込むように顎を撫でる。

その所作は、なんだか飛龍らしくない……いや、彼女も提督なのだ。そりゃ艦娘キャクターの飛龍と違うのは当たり前か。

そんな時、今さらな疑問が湧き上がった。

「飛龍先輩って、どのくらいやつてる『提督』だったんですか？」

「ん？　あー、全然やってないよ。遠征とか回しておいて、大規模作戦イベントは乙とかでの攻略が多かったかな？　戦果稼稼ぎとかスゴいよね。私もああいう若さがあれば良かったんだけど」

懐かしむように話す飛龍。なんやかんやと見てくれは20前後の美少女である飛龍が「若さ」なんて言葉を使うので、面白くなって俺は噴き出してしまふ。

「若さって、飛龍先輩って俺と同じくらいですよ？　つまり、20前

半くらいとか……」

「え？ 飛龍このからだ、私の娘くらいだけれど」

「……え？」

「あーでも。あの子は飛龍わたしほど綺麗じゃなかったかなー。まあこれは完全に悪口になるからオフレコで頼みたいんだけど、家内がいうほど美人じゃなくてね」

「え？ ええ??？」

俺が固まっているのに気付いていないだろう。飛龍は「家内」と「娘」の話をしていく。俺の想像が及ばない話をする飛龍は、これまで見てきた——まだ丸一日も経っていないけれど——どんな表情よりも楽しそうで……嘘をついている様子はなかった。

「……飛龍、先輩って。もしかして俺が思ってるよりもお年を召されてる感じですか？」

「うん。だから『先輩』って呼んでねーって話だったんだけど」

「いやいやいや！ アレはそういうノリじゃなかったですよね?？」

というかむしろ、俺に死ぬか胸を揉むかという究極の二択を突きつけた場面だったではないか。いやまあ、そりゃね？ すごく良かったですけれど！

「まあいいじゃない。どうせ見た目は大学生くらいで通じそうな可愛い飛龍ちゃんなんだから」

「いやでも、それ結構重要な情報じゃないですか?!」

というか、これまで何となくだけ敬語使ってきて良かったな？

飛龍が20くらいの娘を持つ人間——つまり、恐らく多分は50歳とかそのくらい——だとしたら、そんな相手にタメで話してくる若者とか絶対ウザいじゃないですか。危なかった。

「えー、別にいいじゃんそんなこと。どうせ人間見た目だし」

「いや、それは分かりますけれどね？ いきなりサラッとバラされると……」

というか、あなた絶対楽しんでますよね飛龍先輩。そうして抗議の声を上げる俺に飛龍は。

「まあ。どうせ別の身体こゝなすがたで過ごしていると色々引っ張られるしね」

あつさりど、そんなことを言い放ったのだった。

「……」

何も言えなくなった俺に、飛龍は静かに続ける。思えば、家族の話をしているときも飛龍はふざけているような顔はしていなかった。彼女はずつと真面目そのもので、そして同じ調子で、恐ろしいことをさらりとやってのけるのである。

「別にね、脅してる訳じゃないんだよ。ただね、意外とこれはヤバイよ」

「……そ、そうみたいですわね」

そうは言ったものの、何がどうヤバイのか俺は理解できていない。ただこれは相当に恐ろしいことなのだと、飛龍の真剣な双眼がそう語っていた。

「だからね瑞鶴ちゃん。これだけは覚えておいて、提督<sup>わたし</sup>たちがここで生きていくために守るべき絶対条件。それはね——」

そして飛龍は、とんでもない無茶ぶりを俺に言ったのだ。

それは、飛龍先輩が私に見せた深淵の正体だった。私たちが今日も闘い続ける……艦娘<sup>しぶん</sup>の身体が産み出した、底なしの沼。

—— 艤装を使わないこと。そうしなければ、提督<sup>わたし</sup>たちはいつか自分を見喪うわ。

かいはつ。

「……艤装を使うな？」

「そ。艤装はなるべく使わない方がいい」

そんな無茶な。先ほどまで飛龍はここが孤立していて、そして敵がしよつちゆうやって来ると言ったばかりではないか。艦娘おれたちの身体は見た目通りに細くて、とてもじゃないが艤装そうびの力を借りずに深海棲艦を倒せるとは思えない。

それに何より、先ほどの探照灯。飛龍は探照灯という艤装そうびを使つていたではないか。

「ああ。これ？」

「あつ……ええ？」

そう言いながら飛龍はしれつと探照灯を取り出す。いや、取り出すというよりは手元に出現させたというべきか。なんだこのファンタジー。いや、まあ俺が瑞鶴おんなのこになつてる時点で十分ファンタジーではあるのだけれど。

飛龍は探照灯を付けたたり消したりしながら続ける。

「この程度で艦娘に近づいていくんだったら私はとづくにパツパラパーよ。ある一定のやり方を使えば引き寄せられる量は最小限に抑えられるの」

私は今日まで、そうして戦つてきた。飛龍の目には確かな自信が宿つていた。

「それ、教えて貰えるんですよね？」

「そんなに焦らなくても、ちゃんと教えてあげるって」

いつの間にか迫つてしまっていたらしい。縮まった距離を離して、すみませんと頭を下げる。いいよいいよと笑う飛龍は、これでも50歳くらいの所帯持ち。世の中とは分らない。

「いきなりこういう質問で申し訳ないんだけどさ。瑞鶴ちゃんって提督ほんとうところとしては社会人さんであつてる？」

案内されたのは瑞鶴おれの目覚めた場所……工場。そのただっ広い部屋には、ただの廃墟とは思えないガラクタの山が積まれている。つまり無人の廃墟ではなく、不法投棄の常習犯がやってくるタイプの廃墟になっているのだ。

そしてそんな工場ばしよで、恐らくは……いや、間違いなくポイ捨て常習犯である飛龍は俺にいきなり謎な質問をしてきた。俺が社会人かどうかだって？ 少なくとも、今の見た目は艦娘ずいかくである俺にそんなことを聞いて何になるというのだろう。

「大事な質問だよ」

「……まあ、一応勤め人サラリーマンではありますね」

「そっか。学歴は？」

「学部卒です」

「文理どっちか聞いてもいい？」

なんだろう。これはもしかして、出身大学でも聞こうとしているのだろうか。

「……あの、飛龍先輩。この質問に何の意味があるんですか？」

「どこから説明すればいいか、その前提を聞きたくてね」

「説明？」

学歴が関係あるような説明をするのだろうか。見当がつかない俺を余所に、飛龍はなにやら白いモノを持ち出してくる。ボロボロで形の崩れたそれは……。

「……紙？」

「そうよ。ショートランド工場跡お手製の紙よ！」

うん。これがスゴイのは俺でも分かる。こんな廃墟の中、紙があるなんて凄いこと。まあ、紙と呼ぶには色々とボロ過ぎる感じはあるが……。

「で……こんなもの、なんのために？」

「さーて。ご開帳つとー！」

ぱらりと開かれたそこには、ずらりと並んだ線、線、線……。

「……………これは、ずいぶんと……………下手ですね」

「あーごめん。これは初期に作ったヤツだから、下手なことは見逃し

て?」

下手と言うより、かすれていると表現した方が正しいのだろう。どうやらボロボロの紙に書くのが慣れていなかっただけのようで、飛龍が続々と広げる紙に描かれた図は次第に俺にも意味の分かる物へとなっていく。

「リバースエンジンアリングって知ってる?」

「え、えっと……」

聞いたことはある。確かほら、他の国の製品を輸入して、技術をコピーする感じの……。俺の言葉を遮るように、飛龍は手をかぎす。

「分からなかったら聞いて良いから。ここからは……貴女に全部理解して貰わないと意味がないの」

「それって」

まさか。ここにある紙を理解しろっていうのか。俺の目の前に広げられた紙たちに描かれていたのは、艦載機の絵。それは正面に上と横、それぞれ別方向から描かれている。

「見ての通り、空母艦娘わたしたちが使う艦載機よ。それが零戦で、こつちが97艦攻……99艦爆は足が特徴的だし分かるわよね?」

機械にあまり詳しくない俺でも、全体図を見れば分かる。これは艦載機の設計図だ。となれば他の飛行機の形をしていない絵は、エンジンやなんやらの細かな部品なのだろう。

「これ、全部飛龍先輩が書いたんですか?」

「ええ。この子達を分解して調べたの。寸法まで完璧って訳にはいかかったけれど、まあ、旋盤で削ろうって訳じゃないからね」

「旋盤?」

俺の問いに、工作機械の一つよと答える飛龍。つまりアレか、この設計図で実際に零戦かなにかを作ろうとでもいうのか?

『艦これ』には『開発』ってのがあったわよね。覚えてる?」

「え、ええ……そりゃ、まあ。それをやるんですか?」

「まあね。では瑞鶴ちゃん。欲しい装備を手に入れるときのこと  
は?」

「開発」を行う、では答えにはならないだろう。開発に必要なのは開

発資材と資源。それらのバランスで開発できる装備が代わり……そうだ、秘書艦の艦種によっても結果は変わるんだっけか。

「この世界は不思議なくらい『艦これ』に準じている。だからどの艦娘が開発を行うかによって結果も変わる……ではその原因は？ 私の仮説は、こうよ。艦娘は何らかの媒体を通じて艦艇の記録を引き出している。自身が搭載したことのある、する可能性のあった武器や装備の設計図みたいなものへ、何らかの手段でアクセスできる」

「……それなら、別に設計図を用意しなくてもいいんじゃない」

「そこまで言って、気付く。そうか。飛龍の言わんとすることがようやく分かった。」

「設計図のない装備が動くためには『艦の魂』が必要なよ。だから私たちはその供給をうけなくちゃいけない。そうね、ゲームとかで言うところのM P マジックポイント っつてヤツよ。そしてその供給を受ける度に、私たちは人間性を喪っていく」

ああ、あくまでも仮説ね。そう前置きしながら、飛龍は続ける。

「私ら艦娘の身体は、恐らく器のようなモノなのよ。だから異世界の提督の魂を受け入れる余地が……ああ、魂っていうのは例え話ね。分かるでしょ？」

その話をする飛龍は、心底嫌そうな顔で続ける。これだけの設計図を書いた彼女のことだ、きつと某邪悪な白菜が出てくるアニメみたいに科学とかそういうのが大好きで、魂とかそういうオカルト的な存在が嫌いなのだ。それでも仮説は仮説だと、彼女は話を進めていく。

「多分、普通の艦娘ならこれで問題ないんだろうね。器たる艦娘に『何か』を流し込むことでなんとなく装備が動かせる。で、恐らく『開発』も秘書艦がその『何か』を流すことでそれに従った装備が顕現する。その時、きつと設計図を使ったりすることはないんだと思う」

けれど私たちがやったらどうなると思う？ 既に別の『ナニカ』で満たされている私たちがそれをやったら。飛龍の主張は、装備を使うほど自分を喪うというのは、そういう意味だったのだ。

「で、私はそれを回避する方法を見つけたいわけ。仮にも私たちは提督なんでしょ？ だったら『何か』の代わりに装備を顕現させることが

出来るはず。それでこれを使った。あ、そうそう。さっきの探照灯もそれね。だから空母でも装備できる」

「ああ……あれってそういう意味だったんですか。てつきり空母飛龍の魂とか、そういうアレから呼び出したんだと思いましたがよ」

俺がそう言えば苦笑する飛龍。そこに浮かんでいる笑顔は、どことなく暗い。

「まあ、とはいえ。本当にこれが安全かどうかは分からないだよ？

『何か』に頼ることなく、私たち『提督』の力だけを使って装備を顕現かいはっするさせる。発想は間違っていないと思うんだけど……」

せめて浸食度を測れる装置とかあれば良かったんだけど。そんなことを言いながら飛龍さんは私を手招き。

「はい、ここに資源。そして秘書艦」

「もしかして、実演するんですか」

「まね。丁度今朝の出撃で何機か落ちちゃったし」

単なる撃墜なら、ボーキで補充できるんじゃないか……と思ったが、考えて見るとボーキをたったの5消費するだけで艦載機を補充できるのはおもしろいのだ。そうなれば「何か」が関わっているということになるわけで……。

「とりあえずまあ、これまでの開発結果から導き出された資源をセツトして……」

飛龍が集められた資源の上で手をかざす。それから何かを念じるように目を閉じると……あら不思議、資源が光り始めたではありませんか。

「設計図を全部思い浮かべる必要はないわ。ただこの開発に成功したとして完成した機体にどのような機能があって、各種の部品がどういう働きをするか。それを思い浮かべるの」

光り輝く資源達は、重力から解き放たれたようにふわりと浮き上がる。そのまま空中で集まると、徐々に形を変えていく。そして――

「――どうよっ！」

「おお……なんかすごい」

そこには、艦載機が鎮座していた。当然のようにそこにある97艦  
攻。

「まあ、こんな具合ってわけよ」

これをファンタジー……と呼んで良いのかは分からないが、とにかくファンタジーのような現象であった。ともかく、今はこれが俺の現実なのだ。

「それで、これを俺にも出来るようになれ。と」

「そ。大丈夫、模型飛行機を作るようなものよ」

まさか。ここまで来て勉強をすることになるとは。しかも機械なんて全くの専門外。思わずため息をついてしまった俺を、どうして責められよう。とはいえ、飛龍の言うことが本当なら装備開発や運用をするたびに俺が俺でなくなるのだ。仕方あるまい。

それにしても、一つ気になることがある。

「あの、飛龍先輩。艦娘<sup>わたしたち</sup>って『何か』にアクセス出来るんですよね」

「うん、そうだけど？　もしかして触れてみたい？」

好奇心旺盛だねえと、飛龍は笑った。

あおぞら。

そこはどこまでも、広がった。

「あ、れ……？」

夢だろうか。その疑問は、胸に張り付いたサラシの感触が否定してくる。少なくとも俺が男なら、胸にこんな布を巻いたりはしないだろう。

それなら、どうして俺の眼前には知らない天井が広がっているのだろう。その天井は澄みわたる青一色のカンバスのようで、そこに白い絵の具が線を引いたような……。

「ああ、そっか……」

ここは知らない天井じゃない。俺の部屋の、消えた天井。いや違うか。昨日の敵襲で爆撃を受けて、俺の部屋は全壊。今俺がいるのは飛龍の部屋だ。

と、いうことは……。

「ぐうう……すうう……」

目の前に、飛龍がいた。「艦これ」は美少女をコレクションするゲームでもあるわけだから、論じるまでもなく彼女は顔はシミひとつ無い美少女。それに「飛龍」はなかなか大きなお餅を持っている訳で……こんな美女が隣で無防備に寝ていて、それどころか同じベッドに入っている。まさに夢のような話である。

なのに、俺は何も感じない。なにせ反応する筈の息子もおらず、それどころか俺自身がその美少女かんむすなのである。まあそれでも、艦娘同士でイチヤイチャできるならそれも悪くない。俺はこれでも長男なので、百合作品の登場人物になっても耐えられる。それどころかむしろ、そうなってくれたらとても嬉しい。

「ん……瑞鶴ちゃん……起きたんだね」

「あ、飛龍先輩。おはようございまふぐうッ！」

そう、こうやってぎゅーっと抱きしめられたり、やだなあ先輩やめ

てくださいよなんて抱きしめ返したりするのだ。そうそう、丁度こんな感じに……。

「おはよ、瑞鶴ちゃん」

だが、飛龍ヤッは男だ。

「……はい、おはようございます」

「おや？ どうしたのかな？ 折角のおつきなおっぱいだよ？」

だが、飛龍ヤッは男だ。俺も男だ。

「先輩……そういうワンパターン、寝起きにやられて嬉しいと思います？」

いい加減にして欲しいと伝えるように私はさっさと起き上がる。飛龍はこれでも一応は寝起きらしく、ううんと呻きながらゆつくりと起き上がった。寝癖を直すようにしてもぴよこんとはねる毛。何時も思うのだけれど、飛龍このひとの髪の毛はどうなっているのだろう。

そんなことを考える俺の気も知らず、飛龍は目をこすりながらに言う。

「うーん。それじゃ、髪とか梳かしてあげよつか？」

「……」

俺が瑞鶴かんむすになってから、今日で一週間。今はもう髪を梳かすことも、ツインテールを結ぶことだって出来る。もちろん左右対称で、だ。

俺は今、飛龍さんに艦装の装着を禁じられている。艦載機やら高角砲、主機の機能を理解しきるまで、出撃するなど言われているのだ。

……で、まあ。こんな鎮守府の跡地じゃすることも無いわけで。飛龍さんが掃海活動しゅつげきしている間に髪かみの結い方を練習したりしていたのだ。それしかやることがなかったのだから、仕方ない。

「いいですよ。だって先輩、結んだことないでしょう」

「いいから、私にやらせてみてよ」

「はあ……」

なんというか、色々慣れてきている自分がいるのが怖い。ツインテールを結んだ時や、紅白の道着に身を包んだときの達成感。鏡の前でポーズを決めたときに「お、決まってるな」とか思ったり。飛龍から練習用として借りた弓を構えて見たときの、少し胸が高まる感じ

……このままじゃ、俺は本当に瑞鶴になってしまおうのではないかと、そんな風に考えてしまうこともある。

「ダメよ、自分だけで抱え込んだじゃ」

俺の後ろに回り込んだ飛龍が、そんなことを言う。

「別に、抱え込んでるわけじゃないですよ」

「ホント？」

俺は嘘を言ってるわけではない。ただただ、俺が俺でなくなっていくのが怖いだけ。

「まあ……ならいいんだけど、さ」

頭がくいと引かれる。飛龍が俺の髪を梳いているのだ。腰まで伸びてしまった俺の髪は、思っているよりもずっと重い。とはいえ、そんな重さにもすっかり慣れた。

「……飛龍さんは、怖くないんですか」

「怖いよ」

そうあっさり、飛龍さんは認めてみせる。俺の髪を結びながら、当然のように。

「怖いよ。私もすっかり慣れちゃったからね」

飛龍は、俺よりもずっと長い時間を艦娘でそのからだ過ごしている。たったの一週間で俺がここまで瑞鶴に慣れてしまったのだ。飛龍がどれほど艦娘に慣れてしまったのかなんて、想像のしようがない。

「大丈夫。人間の脳は結構雑だからね、身体に慣れるのは割と早いのも、別に私は私だし、あなたはあなたでしょ？ その飛龍の問い

を、果たして俺は認めることは出来るのだろうか？ なにせ俺にとっての飛龍は飛龍でしかない。いくら彼女……いや彼が所持持ちで大学に通う娘が一人いると知っていても、俺にとっての飛龍は、やはり飛龍でしかない。

そして恐らく、飛龍にとっても……。

「先輩にとつての私は、瑞鶴でしかないじゃないですか」

「……まあね。私は瑞鶴になる前の提督あなたを知らない」

俺は「私」と名乗るようになった。別に心境の変化があつた訳ではない。飛龍と俺がいるこの鎮守府跡地には他にも艦娘がいて、彼女た

ちに怪しまれないように私と名乗っているだけのこと。既に何度か「俺」とうっかりこぼしてしまつて訝しがられているので、飛龍と話するときも「私」と名乗っているだけ……。

それでも、実際に名乗ってみるとそれがどんどん浸透してくるのだ。「俺」が「私」になつてしまふような気がして……そして、今更「俺」に戻したところで状況は何も変わらない。その事実が俺を苦しめるのだ。

「大丈夫よ、そう簡単にあなたは変わらない」

「そうでしょうか」

「そうよ。大丈夫、私が保証してあげる」

もちろん、そんな保証には何の意味も無い。

「じゃあ、こうしたらどうかな？」

その言葉と共に、俺の胸にぐるりと腕が回される。

「ちよ……ッ！ 先輩、髪はどうしたんですかっ!？」

「飛龍ちゃんは手際がいいから、もうとつくに済んだわよ」

「……」

俺に色々教えてくれる飛龍だが、こういう……なんとというか、隙をみては直ぐにスキンシップを取ろうとする所はどうも気に入らない。

「瑞鶴ちゃん……なんか、言うことないの？」

「……………」『当ててんのよ』つて言いたいだけですよね？ 言いませんから」

「ちえっ、ホントは好きなクセに」

別にそんなことはない。俺は胸がない瑞鶴のことだつてちゃんと好きだし、まあ、胸が大きいにこしたことはないのかも知れないが、ともかく胸の大きさだけで見ている訳ではないのだ。

「まあともかく。あなただつておっぱいは好きなままでしょ？ それでいいじゃない」

「いや……………まあ……はあ、もういいです」

ここで飛龍にどう反論しても結果は同じ。なので精々俺は抵抗を諦める。そんな俺を傍目に飛龍は自身の身支度を整えていく。

「それじゃあ、私は朝の哨戒に行つてくるけれど」

「ええ、分かっています。お気をつけて」

部屋を出て行く飛龍。残されたのは飛龍の部屋。昨日の戦いでは、この部屋だって無傷では済まなかった。俺が初めて見た深海棲艦のシルエツト……画面の向こうの知識として知っていたとはいえ、実際に見ると全く異なるもの。

「あんなのと、飛龍先輩はずっと戦ってるんだよな……」

そう口に出してから、先輩という呼び方にも慣れてしまった自分に気付く。元はといえば胸もみの代償として呼ばされていた「先輩」という名称だが、それを自然と受け入れている自分もいる。これに関しては、まあ。飛龍先輩がすごいから仕方がないのだ。

あんなおぞましい敵と戦うには相当な勇気がいるだろう。

ゼロから艦載機の図面を書き起こし、その部品に渡るまで調べ上げるのにどれほどの時間を要したのだろう。

確実に起こっているという「何か」による浸食に耐え、それを防ぐ努力をする。それにどれほど神経を使っているのだろう。

そしてそんな状況で、俺に世話を焼いている。艦装を背負うなど俺に言い、何もしない俺のことを養ってくれている。

こんな状況でも、俺はまだ何も出来ていない。

そして、朝が来て。また夜が来て。

そして……。

……………。

……………1年が、過ぎた。

赤道直下のこの場所では、季節が巡るなんてことはない。ただし地球は相も変わらず回っているし地軸も傾いている訳だから、雨期と乾期くらいはやってくる。

そして、今は乾期。雨が降りにくいとされる時期だ。

「瑞鶴さくん、もって来て下さいい〜！」

「あ、うん！ いま行くね！」

紙というのが、人類にとつてどれほど有用な発明であつたかは言うまでも無い。まず歴史を紐解くと、紙ほど軽い記録媒体はなかなかない。軽く簡単に折れ曲がるそれは収納性の観点からも極めて優秀。

とはいえ……本音を言えば紙なんかよりもUSBメモリーの方が軽しい便利である。そもそも紙は情報の伝達が遅すぎるし編集も手間が掛かる。もちろん、粘土板や木簡と比べて紙が優秀なのは分かるが……。

とはいえ、紙媒体ハードコピーが社会から消えることはないだろう。俺の会社——まだあの場所に俺の席が残っているのかは分からないが——から判子や役員が消えたとして、コピー用紙にプリントアウトした資料た

ちが消えることはないだろう。

それはひとえに、紙という記憶媒体の独立性にある。USBメモリーは非力だ。それ単体にはなんの価値もなく、唯一それらに価値をもたらすことの出来る電子機器もUSBメモリーに対応していなければならぬ。それら規格に合致していても、電力がなければこれら全ての努力は元の木阿弥と化す。それに比べて紙はどうだろう。確かに紙は水に弱いし日に弱く、そして風にも弱い。ただそれでも、紙は紙だけで記憶媒体としての機能を発揮してくれる。

だからこそ、俺はまだ俺でいられる。

「はい、じゃあそつちを持って……それっ！」

俺が駆逐艦の巻雲と一緒に持ち上げたのは、障子の枠のようなモノ。いや、ようなモノと言うよりか障子そのものと言ってもいい。敢えて違いを挙げるのであれば、そこに白い白濁液が流し込まれていること……もう、随分とご無沙汰してしまった懐かしくも忌まわしくもある存在がなみなみと……。

ああ、はいはい！ こんなボケで笑いが取れるとは思っていませんよ私だって。下ネタは品がないことを共有するのが楽しいのに、独りでそれをやっても何ら面白みはない。飛龍先輩に関しては、あの人工口は許容するくせに工業には厳しいのでじつと冷ややかな眼で見て会話が終わってしまうことだろう。全くもって、難儀な世界に来てしまったものだ。

「ふう、やっと終わったわね。あとは干すだけか」

俺がやっているのは紙の生産工程だ。葉っぱやら木の皮やらを煮込み、何度も煮込み、そうして作ったボロボロの植物繊維を型に流し込んで固める。やっていることは単純だとしても、もの凄く根気の要る作業。

だがそれでも、これのお陰で今日も俺は紙を使うことが出来る。今となっては今更気付いたことではあるが、俺たちの周りには数え切れない程の紙製品があった。朝起きてから寝るまで、それどころか寝ている最中も、紙は俺のことを見守ってくれていた。変なヤツと思うかも知れないが……実際そうだったのだと現在進行形で思い知っている

俺が言うのだから間違いない。

「ふう、これでよし。ありがとね、巻雲」

「……どうも」

相変わらず、愛想のない巻雲である。この塩対応だけは一年経っても変わらなかった。

ともかく、巻雲と協力して紙製作の準備を終えた私は、次の作業へと取りかかる。残念ながら飛龍が俺に課した条件である「自力で艦載機を顕現させられる」ことは未だに達成できていない。それでも、俺が出来ることは多い。というより、やらねばならないことが多すぎる。

「そしたら次は……」

瑞鶴このすがたになる前の俺は、納期と朝礼と終電に追われながら毎日を過ごしていたが、こうしてみると今も変わらないような気がする。薪や食料になりそうなものを集めては、隙間時間を見つけて勉強する。もちろん勉強対象は艦載機だ。飛龍先輩の書き留めた艦載機の設計図と実物を見比べ、分からない箇所は飛龍先輩に聞く。そして一日の最後には艦載機の顕現に挑戦して……そして、姿を変えることなく落ちる資源を眺めることになる。

「はあ……どうすりやいいのよ……」

分からないまま、もう一年が経ってしまった。飛龍先輩はこの世界にやって来てからの日数をキチンと数えているようで、少なくとも俺が瑞鶴となった日は一致している。つまり現実でもきっかり一年が経っている訳で……果たして現実あっちはどうなっているのだろう。流石に行方不明として搜索願くらしいは出ているだろうか。会社は……流石に一年も経てば退職させられているだろう。住居は確か口座引き落としだから、うわあ暮らしてもいない家のために一年分の家賃を引かれているということになるのか。いや、行方不明の場合は既に片付けられているだろうか？

いずれにせよ、この世界こにいるうちは分からないこと。

「……さあ、今日も俺が俺であるための日記を書こう」

考えるよりも手を動かす。飛龍先輩に勧められて始めた日記には、

ここでの生活のことや俺自身が考えたことがつらつらと書かれている。これは「自分」を見失わないもの。自分だけで決めた場所に隠しておいて、自分の考えをまとめておくための場所だと言う。

だから飛龍先輩がここにどんなことを書いているのかを、俺は知らない。

ぺらりと紙の日記を捲る。手作りなのでなんやかんやとボロボロな紙だが、それでも1年前からの外見をすっかり保ったそれ。炎で炙った小枝を鉛筆代わりにした文章には、俺のことが書かれている。どこで産まれたか、何をしてきたか……当たり前のように俺が把握している情報が、単調に書き連ねられている。

そして唯一空いているのが、俺の名前。俺は俺の筈なのに、どうしてだかこの身体には「瑞鶴」という名前しか与えられていない。

「飛龍先輩は」

先輩は、どこまで飛龍に染まっているのだろう。俺にそれは分からない。飛龍先輩がまだ提督であったころ、彼はどんな人間だったのだろう。俺が知っているのは先輩としての飛龍だけ。

そのまま過去の「俺」が書き残した文章を辿っていく。飛龍先輩からは定期的に読み返して違和感を覚えないうか、それを観察する意味でも大切だと言われたけれど。果たしてその「違和感」がなんなのかも俺には分からない。まあ、それはそれでいいことなのだろうけれど。「あれ。そういえば……」

そこでふと、日記に書かれていた一つの記述が目にとまる。飛龍先輩が大型機の設計図を書いているという話。空母飛龍に注がれる「何か」では艦載機しか顕現させることが出来ないため、まったくのゼロからの開発になると書いてあった。

「全然覚えてなかったな……やっぱり日記つけるのって大事なのね……」

折角だし、どうなったか聞きに行ってみようと思う。少なくとも、ここであらうだと日記を読んでいるよりかは生産的だろう。

そうして俺は、自分の部屋を出て、飛龍の部屋へと向かったのだ。た。

「……もしあそこで、私が飛龍先輩の部屋にいかなければ。何か変わったのかな？」

「どうでしょうね」

背中から加賀さんの声が聞こえる。加賀さんの胸はやわらかで、背もたれ頭もたれにするのに丁度良いのだ。普段なら「邪魔よ」と言ってくる筈の加賀さんも、今夜は何も言わずに、私の話を聞いてくれている。

「変わったかもしれないし、変わらなかったかもしれない。選ばれなかった選択肢は、いつまでも『可能性』として残る。それでいいのよ」  
「……うん、そうだね」

それなら。まずはその可能性にならなかった方……私の思い出話を終わらせてしまおう。私の先輩の……きつと、同じ空の下でまだ暮らしている筈の先輩の——その顛末を。

## 飛龍風雲。

廢墟というだけあって、この鎮守府跡地の夜は中々に不気味だった。

それはつまり証明の消えた廊下であり。それはつまり滴の落ちる天井であり。

そして煌々と、灯りの漏れる一つの扉であった。

飛龍先輩は夜、寝ていない。もう少し正確に言うと、私よりも毎晩夜更かしをしている。明け方に少し寝て、朝の掃海活動の後でまた寝て……昼寝の時間を取ることで睡眠時間を確保しているようだ。

毎晩遅くまで起きているのは、先輩が言うには夜間警戒としてのニュアンスもあるというのだけれど……しかし実際には、現代日本の生活を維持しようとしているように思えて鳴らない。

私たちのいた日本は国中が不夜城のようなものだった。街中には朝までネオンが輝き、路地裏に至るまで電灯がひしめき。インターネット上では眠りを知らない誰かが常に情報を更新し続ける。そして俺も、そんな眠らない窓枠の中で『提督』をしていた。まだ寝ないの？などと形だけの台詞を艦娘キャラクターが囁く中、オリョール海やらバシー海峡をぐるぐる……まあ、そんな情熱に満ちた時代はとうに過ぎ去ってしまったが、思えば今は、そんな日々すらも遠い記憶の向こう。ここでは、そんな風にやるべき事は無い。ここは世界から隔絶された孤独な泊地跡。頭が疲れて勉強する気が無くなっても、手慰みにゲームをやると言うわけにはいかない。

それでも尚、俺はここでこうして何もしていない。海に出ないのは「自分」を守るため、艦装を展開すると、自分が自分でなくなってしまうから……そんな言い訳をしていたのは何時までだっただろうか。徐々に徐々に現実感がなくなっていく現実ていじくの記憶は、浸食ではなく単なる健忘だと気付いたのはいつだろうか。

そんな日々に、きつと飛龍先輩は立ち向かおうとしているのだろ

う。

「……そういえば、飛龍先輩は私のこと。どう思っているのかな」

そして私は、なにを考えているのだろう。飛龍先輩は元々家族がいて、瑞鶴わたしのことだっただって娘のような感じにしか考えていないのだ。そもそも、先輩に守られ、教わり、養われているこの状況こそがそうではないか。

まるで偽物の家族。

……家族、家族か。もう家族に一年会ってないことになる。いやまあ、もともと大学に進学した頃から正月に少し顔を出すくらいだったけれど。お盆に年末はお台場で大規模なイベントがあったから……そうか、もうイベントにも一年参加してない。

「そんなこと考えてどうするのよ……ああ、どうするんだ」

そしてこれが、この状況こそが。俺が……いや私が、一年間という期間を使って積み上げた「成果」だった。望まぬ状況に放り出されて、今日までずっとこうして過ごすしかなかった。元の世界に戻るどころか、この世界の日本にすらたどり着けていない。そんな状況が、段々と「私」を作り上げていったのだ。

「飛龍先輩？ 居ますか？」

そして、私は飛龍先輩の部屋へとたどり着く。ところが部屋には真ん中にポツンと小さな灯りがひとつ揺らめいているだけで、私が探した影はなかった。少しお手洗いで席を外したというより、初めからここにはいなかったかのよう。

「そうか。工廠か」

少し考えて、その結論に思い当たる。飛龍先輩がこれまでに書いてきた設計図の大半は、工廠に保管されている。まあ「開発」を行う場所が工廠と考えれば当然のこと。

「折角だし、夜食でも作っていいのかな」

飛龍先輩は、まだ戦い続けている。設計図を作って装備を顕現かいはつするさせることで浸食を押しさえようとしている。一方の私といえば、まだ電探やら高角砲など、そういう直接身につけるような艤装しか顕現させることが出来ない。

そしてそれは、空母として役に立たないことを意味していた。

『私たちは運が良かったよ。慎重に立ち回りさえすれば、被弾せずに済むんだから』

それはいつだったか、出撃をせがんだ私に飛龍先輩が言った言葉。いくら飛龍先輩でも、存在しない軍艦飛龍を設計図に起こすことは出来ない。それはつまり、被弾時の修復……つまり入渠を全て「何か」の力に頼らなければならぬことを意味する。

『空も支配できないのに、この世界に勝てると思う？』

思わないですよ、俺だって。でも思うのだ。このままで良いのだろうか。このまま、なかなか頭現の成功しない艦載機と向き合い続けていていいのだろうか。

「……」

分かっている。その問いに私は結論を出しているじゃないか。そもそもどうすればいいのかも分かっていない。答えを得ようにも、問題文すらも見えないのだ。こんな状況でどうやって答えを出せというのだろうか。

藪を抜ける。思った通り、工廠の跡から小さく灯りが漏れている。深海棲艦は大規模群体が現れない限りは積極的に仕掛けてこないのだ、こうして大つぴらに明るくしておけるのだ。

「——ッ」

「!？」

その時、私の耳に本当なら届き得ない筈の音が届く。

「え……？　今のって……アレだよね？」

もう随分と聞いていない声。いや、自分のものとしては聞いているけれど……でもそれは、あくまで自分のものとしての話。

そういえば、散々シモの話をする飛龍先輩——あの人がわく、女子校なんてこんなもんでしょとのこと——も、自分がどう処理しているかは聞き出せたことがなかった。のらりくらりと躲されてしまっていたのだ。

「じゃあ今のって……飛龍先輩の……？」

いや、でも。それにしても少し違うような……。それとも、飛龍先輩はあんな声で……？

恐る恐る工廠へと近づいていく。鼓動が押さえられず、一步一步がさつきよりずっと重く感じる。頭の中には何も浮かんでこないのに、胸の中では名付けるには複雑すぎる感情が渦巻いていく。

「……つ、はあ……」

また聞こえた。でもそれは、明らかに飛龍先輩の声ではない。なにせ――

「はい、深呼吸、深呼吸……」

その次に、別の声が続いたから。聞き間違えるはずもない、飛龍先輩の声だ。

ということとは、じゃあ。今の声は飛龍先輩ではない誰か……ここには私と先輩の他には、駆逐艦が二隻いるだけ。じゃあそのどちらかということか。

「……先輩」

先程までの胸の内と違って、私の頭は怒りと失望で一杯だった。飛龍先輩にとって工廠というのは、聖域みたいな……冒すべからずな場所じゃないのか。こんな場所でこんなことを、ホントにしているというのか。

ただその一方で、こうも思ってしまったのだ。やっぱりそうなのかと。

私だって、結局我慢できなかつた。我慢できずに、良くないだろうと思っただけでも、やってしまった。

飛龍先輩だって、提督おとことか艦娘おんなとかを越えた、人間なのだから。

「はあ、は。飛龍さ、ん……」

「いいよ、いつも通りに、落ち着いて……」

耳を塞いだって事実は覆らない。飛龍先輩は、ここでこうして、いつもこうしていたのか。

真っ白な半紙に落とした墨汁のように、どんよりとして絶望が広がっていく。

嗚呼、私は。

「なにやってんだろ……」

どうしてここで腰を落としているのだろう。どうして耳をそばだてて、二人の声を聞いているのだろう。

「瑞鶴ちゃん。いるんでしょ？」

極めて冷静に、よく通る飛龍先輩の声が聞こえたのは、それからどの位経ったときだっただろうか。いまさら抵抗したり逃げ出す気も起きず、私は立ち上がる。袖で指を拭いたのは、せめてもの抵抗。

「……まあ、気付いてますよね。索敵は慎重につて、先輩の口癖ですもん」

「まあね」

そしてそこには、飛龍先輩ともう一人の影……風雲の姿があつた。

「言いたいこと、言つて良いよ」

「………なんにも、ないですよ」

どうして。俺に何を言えと言うんだ先輩は。こんな今の私に、どうして先輩を責める資格がある？

「なんにもないんです」

「それは困るな。私だって言い訳のひとつやふたつはしたい」

それなら、私にだって弱音のひとつやふたつ、吐かせてくれたつていいじゃないか。

この現実を、このクソツタレな現実を……でもそれを、口に出してどうするんだ。口に出したところで何も変わらない。何も良くならないというのに。

「まあいいよ。あんまり瑞鶴ちゃんには見せたくなかったんだけどね」

座りなよと促す飛龍先輩。私は首を振る。

「今夜のこと、見なかつたことにしますんで」

ここで背を向けて帰ればいい。何もなかったことにして、そのまま過ごせばいい。飛龍先輩だって私がひとりでしていることは気付いているだろう。だからこれで、お互い恨みっこ無し。

「いいから、こっちにおいて」

それなにどうしてか、飛龍先輩は私を無理矢理に引き寄せた。ぐつと詰まる距離に、少し火照った先輩の表情が大写しになる。そしてそれは、不敵に笑っていた。

「必要なことなのよ。これはいうならば、儀式」

「ぎ、儀式……？ 子供でも作るんですか」

「そうだったら良かったんだけど、ね」

そう言って飛龍先輩は風雲を見下ろす。そこには気持ちよさそうに……いや、無表情で眠る駆逐艦娘の姿。そして先輩は、平然とんでもない言葉を言い放つ。

「いまから、風雲の『何か』にアクセスするわよ」

「え？ なにを言ってる……」

「いいから、見てなさい」

有無を言わさず飛龍先輩は風雲へと向く。そして次に、その言葉を放った。

「R、U、N、ENTER……起動！」

## 二重規範。

「R、U、N、ENTER……起動！」<sup>RUN</sup>

その言葉は、まるで呪文のよう。飛龍先輩は微動だにせず、私も……それどころか、気持ちよさそうに横たわる風雲も動く気配がない。

「飛龍先輩。今のって」

「ん、知ってるでしょ？ 昔のコンピュータはこうやって動かしたんだよ」

「コンピュータって……」

「まあ、私もあんまり詳しくないけどね。ある程度の『概念』が理解できていれば『開発』で実装することは可能なんだよ」

「実装、って」

そんな。まるで艦ゲームこのアップデートみたいに言われても困る。風雲に実装した？ 実装したって、なにを。

「なんだろう。専門的な説明はともかく、風雲をコンピュータにした……風雲の深層意識にプログラムを埋め込んだって言えば良いのかな？」

「そんなことが」

「大戦の頃から機械式の計算機はあったよ？」<sup>コンピューター</sup>

「いや、そんな……」

仮にそうだとしても、それはあくまで軍艦艦娘の話だろう。艦娘は艦娘であって、その全てが軍艦のそれに準じている訳ではない。<sup>キャラクター</sup>

「ほら、装備なら司令部要員があるでしょ？」<sup>インストールするかんじのやつ</sup>

「……だとしても」

まあ聞きなつて、口を開き駆けた私を飛龍先輩が遮る。

「この世界で飛龍にされてから、私はずっと考えていたことがあるんだよ。瑞鶴ちゃんは、現実世界……ああつまり、私たちが『提督』として過ごしていたあの日本のある世界が、ゲームの世界だって考えたことはある？」

「……なんですか、そんな、出し抜けに」

現実世界は実はゲームの世界、別次元にプレイヤーがいて、その自分でない誰かに操られることによって生きていたりとかいう奴だったか。確かに都市伝説か何かではそんな話を聞いたことはあるが、仮にそうだったとしても確かめようのない話。

「分かんない？　ここはゲームの世界な訳じゃん。つまり、私たちは高次元のゲームプレイヤーとしてこの世界にログインしているんじゃないかって話よ」

「いや……待ってくださいよ、先輩ー」

待て待て待て。話が全くもつて読めない。高次元？　ログイン？

そりゃ、確かに艦これは2次元だったかもしれない。その意味じゃ、3次元の方が高次元というのは納得できる。

しかしログインってなんだ。別に私は瑞鶴にログインした訳じゃない。それにログインしたなら、ログアウトできるのが普通だろう。

「じゃあなんですか、飛龍先輩はここが仮想空間、SFとかに出てくるフルダイブVRの世界で、ラノベでよくありがちな展開でデスクゲームに囚われてしまったと？」

まあ、そんな感じかな。飛龍先輩は頷く。その眼は冗談ではないと語っている。

「でさ、そこにNPCがいる。私たちがみたいは『現実』のことを知らず、自分自身を軍艦そのものだと信じてやまない艦娘がいる」

そしたらさ、動かせるんじゃないかって思ったのよ。プログラミン  
グ言語か何かでさ。そんなことを飛龍先輩が言う。

そんな飛龍先輩を見た私がまずしたのは……まず、自分の眼を疑うことだった。

「……なにかの、冗談ですよね？」

本気で言ってるなんて思えない。飛龍先輩はおかしくなつてしまったのだろうか。工場で設計図を書いてきた飛龍先輩は何処へ行ってしまったのだろうか。

「冗談じゃないから、見せたくなかったんだよ。私は風雲ちゃんにプログラムを仕込んだ。その事実は」

そしてやはり、私の眼は間違っていないいらしかった。飛龍先輩はどこまでも本気だ。

「2次元のNPCはプログラムで動く、知ってるでしょ？」

「そりゃ、知ってますけれど……でも！」

だからって、それが風雲にプログラムを仕込む理由にはならないだろう。それはつまり、風雲のことを……。

「ま、百聞は一見にしかずだよ瑞鶴ちゃん」

それだけ私に告げて、飛龍先輩は「呪文」の続きを風雲へと注ぎ込んでいく。やがて風雲も何事かをポツポツと呟きはじめるようになるけれど、それは明らかに「風雲としての発言」ではなかった。

そしてなにより不気味なのは飛龍先輩。彼女は何事も言わず、風雲の口から流れてくる言葉を紙に書き取っていく。時折それを眺めては、新しい呪文を唱える。

ただ、その繰り返し。

「……なにを、してるんですか」

その言葉に、飛龍先輩は応えない。ただ「見ている」とばかりに私を一瞥して、それからすぐに紙へと視線を戻す。そこには、いつの間にか何かの数式らしいものが浮かび上がっていた。これでも授業は聞いていた方と自負している私だ。数式ということは分かる。ただ問題は、それらの記号が何を意味しているかは分からないこと。

「……………よし、今日はこの辺にしようか。K、I、L、L、ENT E

R……………終了！」

そして、工廠に沈黙が舞い落ちる。

「お疲れ様、風雲ちゃん」

額に僅かながらの汗を浮かべた風雲をささる飛龍先輩は、いつも通りの飛龍先輩。

だが、その眼に宿っているのは……私に言わせれば、狂気でしかなかった。

「説明してくださいよ」

「見て分からなかった？ 風雲を計算機に……」

「その説明はさつき聞きました！ なんでこんなこと、してるんです

か？」

私も、どうして自分がこんなことを聞いているのか分からなかった。確かに風雲は「提督」ではない。それなら、風雲をどうしても「提督」である飛龍先輩の勝手だという理屈は分かる。いや、そうじゃなきゃ、誰かを人で無い存在コンピュータにしておきながら「実装」なんて言葉を使える筈がない。

なのに、いや、だからこそ。「提督」であると同時に「艦娘」でもある私の脳内には警鐘が鳴るのだ。飛龍先輩が今していることは、多分、踏み越えてはならない一線だ。それだけは間違いない。

「時間がないんだよ」

そして飛龍先輩は、開き直るといふ選択肢をしたらしかった。

「もし、無限の時間があれば。私だつてこんな手段に訴えることはなかったと思うよ？」

「そこまでして、飛行機を作りたいんですか？」

私の問いに、飛龍先輩は首肯してみせる。

「瑞鶴ちゃんだつて知ってるでしょ？ ゼロ戦しよに99艦爆そや97艦攻びなんかじゃこの島を取り囲む深海棲艦には勝てない」

だから、新型機が必要なんだよ。そんなことを彼女は言う。

「でも、その『概念』を風雲は持ってないでしょう。大型の航空機、それは風雲の『何か』からでは生み出せない筈ですよ」

「うん。だから計算機として使わせて貰ってる。考えてもみてよ瑞鶴ちゃん、あのライト兄弟が初飛行してから、人類が大気圏を飛び出すまでに半世紀もかかったんだよ？ それも何十億人の世界で取り組んで半世紀だ」

わたしひとりで、出来ると思う？ 答えが否なのは分かっている。だけれど、だからといって、それで納得出来るはずがないことを飛龍先輩は分かっている筈。

なにせ飛龍先輩も提督——私と同じ、現代日本で「艦これ」をプレイしていた「提督」なら、現代日本の価値観を共有している筈なのだから。

「風雲は、単純だけれど膨大な計算が必要な箇所と、三角関数表みたい

な過去の人々が求めてくれていた数字を引用するのに使ってるんだ」  
流石に関数表は暗記してないしね。飛龍先輩の言葉は、私の認識と  
はあまりにもかけ離れている。

「……ふ」

「ん？」

「ふざけないでください！ あなたはっ！ 風雲かんむすのことをなんだと  
思ってるんですか！」

「データだよ。そして、私たちはこの世界もデータであつて欲しいと  
願ってるはずだよ。自分がデータに成り果てたくない、とも」

「それは！ そうですけど、でも！」

「でもじゃないんだよ」

飛龍先輩は止まらない。

「瑞鶴ちゃんが言いたいことは分かるよ。私たちは同じ命。互いに尊  
重し合わないといけない。でもそれは、ゲームの世界でしかないこの  
場所いのちに存在いのちを認めてしまうことになる。私たちには、  
現実リアルとゲームを隔タてる壁壁が必要なんだよ」

そうでなきや、私は本当に飛龍かんむすになつてしまう。飛龍先輩はそんな  
ことを言う。

「無理ですよ」

嗚呼、苦しい。流れ落ちる水が証明している。これは胸が苦しいん  
だと。もう私たちはとつくに限界を迎えているのだと。

「無理ですよ、飛龍先輩」

飛龍先輩は笑う。私がなにを考えているのか、これから私がどんな  
死刑宣告を下すのか知って、力なく笑う。

「あなたが本当にダブルスタンダードを保っているなら、風雲のため  
に……泣いたりほしくない筈です」

「うん。そうだね。私はもう、おしまいだね」

そんな、きつと随分昔から分かっていたことを、飛龍先輩はただ、認  
めるのだった。

## 航海日誌。

・覚書

AD2019 || H31 || S94 || R1

R1 / 6 / 17

ついに、ついにやった！文明の利器「紙」を手に入れた！

これでようやく日記らしい日記がつけられるようになる。ひとまずこれまでの記録の書き写し、あと資材と装備の帳ぼもつけられない。やることが多い！

今日はみんなで日記付け、それと個人情報の記録を行う。くれぐれもおく測で書かないようにと飛龍さんに言われる。おく測でない記憶なんてあるのだろうか？ 昔のドラマで聞いた「人の記憶は強くて脆い」という言葉を思い出した。

R1 / 6 / 20

装備、そして資材の帳ぼが完成する。これまで雑に放り込んでいただけだったので時間も時間が掛かってしまったが、これからは大分楽に管理できると思う。それにしても深海棲艦を刈るだけで資源が手に入るなんて、この世界はずいぶん楽だなあと思う。

R1 / 7 / 7

新しい服を仕立ててみる。仕立てたというより、風雲から奪ったという方が正確なのだけれど。なぜなら、服が脱げている状態で入(↑「にゆうきよ」漢字わからん)すると服が復活することが明らかになったから。紙が手に入ったことよって飛龍さんが実験を始めたので、いろいろ情報が集まりはじめている。服は装甲板としての役割もあるのだ、明日は実際に被弾が防げるかを確かめる予定だ。

それにしても消しゴムが欲しい・・・

・  
・  
・

R1 / 8 / 9

コミケにいかない夏、何年ぶりだろう。風雲に水着 mode の話をしたら、試してみようという話になって試してみたところ、本当に水着に着替えることができた。（開発したら現れたのである！）飛龍さんに自慢したところ、飛龍さんは出来なかつたらしくヤシの葉で代用していた。やはりあのひと、どうかしている。

R1／8／10

飛龍さんとコミケの想い出話をしていたところ、おそろしい事が明らかになってしまった。コミケに関する記憶にズレがあったのだ。思い違いとは思えないので、仮説のひとつにあつた浸食が実際に起きているということだと思う。飛龍さんは「昔書いたことは嘘をつかない。だから確信を持ってないことは何も書くな」という。これは大切なことだと思う。たとえ記憶がなくなっても、ここに書かれた事実は動かない。

・  
・  
・

R1／8／14

飛龍さんが記憶についての仮説を話す。飛龍さんの話によると、浸食は艦娘としての能力を使うと進むらしい。ただ記憶の話は主観の部分が多いので、実際にどのくらい浸食が進むかは分からない、とお互いに平成日本（風雲とは令和日本の話も）することで話題のズレを見つけることにした。今後は別のノートで話題についての管理も行うことになる。それぞれが見張り合うのは気分が悪いけれど……しかたない。

追伸・全員与党支持者でよかった……

R1／8／15

何もしない。何もしないことが、抵抗だ。

・  
・  
・

R1／8／17

想像以上に浸食が早い。早くも話題のズレが発見されてしまう。今回の原因は「開発」。高角砲を呼び出した風雲が歴代総理の名前を

忘れた。ノート5pの上から三番目に書いてある総理の名前を忘れるなんてありえない。これは、やばいかもしれない。

R1／8／18

出撃による浸食を確認するために、今日から風雲を一週間の出撃停止にする。仕事は増えるが、こればかりはしかたない。

R1／8／19

飛龍さんが私をかばう。最悪だ。飛龍さんが入きよすることにやってしまった。やっぱり三隻じゃないとダメだったのだ。風雲は自分を責めないでと言ってくれたけれど、どうして責めずにいられるだろうか。

誰か助けて。

・  
・  
・

R1／9／1

ここでの活動方針が「生活」から「脱出」に変わる。例え食べ物や安全な場所があったとしても、記憶がなくなってしまうのは元も子もないからだ。飛龍さんは現代日本の知識が消えてなくなってしまう前に、現代日本の知識を精一杯活用しようという。エンジニアだった飛龍さんなら出来るだろうけれど・・・自分のことがいやになる。

・  
・  
・

R1／9／12

飛龍さんがついに工しようから出てくる。「何か」に頼らない艦載機の開発に成功したのだという。これなら、少なくとも出撃のたびに記憶がなくなるということはなさそうだ。今日は久々にみんなで楽しくご飯を食べることが出来た。よかった。

・  
・  
・

R1／9／27

飛龍さんにも焦りの色が浮かんでいる。開発が上手くいかないのはこちらと同じ。むしろ艦載機どころか高角砲も出せるようになって

た飛龍さんはすごいと思う。そして今日、飛龍さんは「最初に艦娘になった自分だけがいてく(プレイヤ―)なのかもしれない」と言った。酒に酔っていたら、そう思いたい。たとえ自分の名前が思い出せなくなつて、自分は自分だ。風雲も同じ思いだと思う。

・ ・ ・  
R1 / 10 / 5

飛龍さんはもう一週間、毎日お酒を飲んでいる。今日は酒を隠したところ、その場所を偵察機を出してまで探し出してきた。どうすればいいのか、分からない。

R1 / 10 / 6

そういえば、昔は飛龍さんが犯人だと思っていた。そんなことを思い出した。それとこっちは駆逐艦で、あつちは空母なのだということも思い知った。飛龍さん、強かつたなあ・・・でも、こんなに楽しく話せたのは久しぶりだと思う。そう思ってこの日記を読み返したら、似たようなことが一ヶ月前に書いてあった。

ストレスでどうかしているのだ。

R1 / 10 / 6

今日は出撃なし、開発もなし。水着modeも浸食に繋がるので何も着ないで海水浴をした。エロ同人誌でこういうのありそうなんて話もした。その先も、少しだけ。

でもそれにしても、敵が現れないのはおかしいだろう。  
たぶん飛龍さんは、ナイショで艦載機を飛ばしている。

・ ・ ・  
R1 / 10 / 19

風雲がとんでもない提案をしてきた。私は頷いてしまった。このことは敢えて記録には残さない。忘れたなら巻雲、お前はもうおしまいだ。

・ ・ ・

・  
・  
・  
R1 / 11 / 18

今日は、3人のていとくで行う最後の食事。裏切り者はいないけれど、誰も悪くはないのだけれど。どうしてこんなことになるのだろう。とても悔しい。悲しい。みんなでいっしょに泣いて、泣き止まない飛龍さんを寝かしつけた。

明日から私たちは、飛龍さんの艦娘になる。

R1 / 11 / 19

1日目・快晴

出撃3回。敵12体撃破（うちヒト型0）被害ナシ（艦載機8機撃墜）

昨日の今日なのであたりまえなのだけれど、飛龍さんは昨日のことを覚えている。まだ別の日記だけじゃなく本来の日記も書きたいらしいので、代筆することにしてあげた。仕事は増えるけれど、これが自分の仕事だ。

・  
・  
・

R1 / 12 / 23

35日目・晴れ

出撃0回。敵なし被害なし

そういえば、令和の天皇たん生日っていつなんだろう。浸食のために忘れてしまったのか、それとも初めからそんなものには興味がなかったのか。飛龍さんは今日が平成における天皇たん生日とは言わなかったけれど、食事はワンランク豪華になっていた。

大丈夫、飛龍さんはちゃんと覚えている。まだ飛龍さんの平成は消えていない。今はそれを信じることにする。

ただそれでも、令和のことは忘れていようだ。やはり艦娘として過ごした記憶は、喪われやすいということなのだろう。

そしてそのうち、ていとくであったことも忘れてしまおう。令和を知

るのは、もうすぐ自分だけになる。

・  
・  
・

R 1 / 1 2 / 3 1

4 3 日目・快晴

出撃5回。敵23体撃破（うちヒト型7体）被害、風雲中破（艦載機68機撃墜）

今日はずいぶんと沢山の敵が現れた。年末のくせに空気の読めないヤツらだ。

久々に風雲と仕事以外の話をする。飛龍さんのことばかり話していて、自分のことは何も話していない。艦娘として艦の記憶に埋め尽くされた訳ではないが、自分のことは忘れてしまった・・・という感じだろうか。いずれにせよ、見てもらえない。

・  
・  
・

R 2 / 1 / 1 2

5 5 日目・快晴

出撃0回。撃破ナシ被害ナシ

夕チの悪い冗談だと思いたい。瑞かく（↑漢字忘れ、はずかしい）さんが目を覚ました。よりにもよって、このタイミングでだ。あと3ヶ月ほど早ければ、、ただ考えて見ると、これも飛龍さんの言う「安全弁」になるかもしれない。なるといいのだけれど。とりあえず瑞かくさんが現れたおかげで、飛龍さんが自身をていとくであること認識していることは確認できた。それだけでも今日はよかったことにする。

いずれにせよ。私のやるべきことは変わらない。

・  
・  
・

R 3 / 2 / 2 8  
もう限界だ。明日、瑞かくさんに全てを話すことにする。

• • • •  
• • • •  
• • • •

まきぐも。

「嘘だと否定して欲しいですか？ 瑞鶴さん」

「いや、それは……その」

否定して欲しい。その通りだ。でもじゃあ、私の手に今収まっているこのノートはなんだ？ 令和元年から令和3年まで付けられていた日記。私が途中から記していたそれと同じように、一日たりとも欠かすことなく書かれた生活の記録。

「私と風雲は、飛龍さんに建造されたんです。ちようど、瑞鶴さんと同じようにね」

「……そして、二人とも『提督』だった」

ええ、そうです。目の前の艦娘がそんなことを言っている。そんな馬鹿な、じゃあ、私が艦娘だと思っていた二隻の駆逐艦娘は、私と同じような「提督」だったというのか。

「分かりますよ。昨日までゲームの中の存在、架空の人物だと思ってた相手が実在すると聞いて驚いてる感じですよね」

「それは」

「いいんですいいんです。それはつまり、私がちゃんと『巻雲』を演じられていたってことですから」

返す言葉もない。私がこの人のことを「巻雲」と思っていたか？

もちろんそう認識はしていただろう。だけれどそれは巻雲らしい言動をしていたとか、そういうことではない。むしろ彼女は「巻雲」らしくはなかっただろう。

にも関わらず私は彼女を「巻雲」以外の何かであると考えなかった。それはつまり、私が外見だけで「瑞鶴」と判断されてしまうのと同じ事。

もしくは……。

「……同じ提督だと、思いたくなかった。二重規範ダブルスタンダードを敷きたかった……飛龍さんみたいに」

でも、それは違った。私たちは艦種や艦名が違うだけで、同じ「提督」だった。

『まずは受け入れるの』

「飛龍さんは……受け入れられなかったんだね」

「無理ですよ。だって、もしかしなくても私たちが建造ここへよんだしたのは飛龍さんなんですから」

「……………」

沈黙が舞い降りる。これまでの記録を背にした巻雲は何も言わない。私は何度も深呼吸をすけれど、胸の苦しさはどうしても無くならない。

「どうして、今なの？」

口をついて出たのは、どうしようもない疑問だった。

「どうして今なの？　あなたが私に打ち明ける機会はいつでもあったよね？　二人で作業していた時や、飛龍さんが風雲と行動を共にしていたとき、この一年間で、いくらでも機会チャンスはあったはずだよ？　なんで今日まで、言わなかったの？」

巻雲は何も返さない。私がヒドい質問をしているのは分かっている。なにせこの問いの答えは航海日誌に書いてあるじゃないか。

もう限界だ。

巻雲もまた、限界に達したのだ。飛龍さんがそうであったように……私が、そうなったように。

「私に言わなかったのなら分かってるんでしょ。私は、この事態に対して何も出来ない。飛龍さんと風雲のことに口は出せても、二人の問題を……私たちの問題を解決することは何も出来ない」

私は無力だ。深海棲艦を倒すことも出来ないし、ここでの生活だけで自分一人で全部出来るわけじゃない。巻雲が今日まで私に……「提督おなじ」だと分かっている筈の私に何も言わなかったのがなよりの証左じゃないか。

そしてそれなら、なんでこんな時に、よりもよってこんな時に私を巻き込むんだ。限界になって、もうどうしようもない時に言ってくれるなよ。破滅するなら勝手に破滅してくれよ。そんなこと、俺に

いってどうするんだ。

「———」

「え?」

卷雲が口を開く。そこから出てくるのは、弱々しい言葉。

辛うじて聞き取れたそれを否定したくて、私は聞き返す。

「なんて、言ったの?」

「終わりにしようと、思ってます」

卷雲の口から語られたのは、あまりにも単純な計画。

まず、ここにある資料、これまでの飛龍、風雲、卷雲……そして途中からは瑞鶴わたしの生活の記録を全て飛龍さんに開示する。責任感の強い飛龍さんのことだ、自分自身がゲームの存在として扱ってきた僚艦かやくもまきぐせたちが「提督」だったとすれば、きつともう限界を越えて……いや、既に越えている限界に越えようなんてない、きつとどうかしてしまっただろう。

そして本当に、全てを終わりにする。

「だから、それでいいか。瑞鶴さんにも聞いておこうと思ったんです」

「……それ、私に拒否権はあるの?」

我ながらひどい質問だと思う。卷雲はいきなり全てを終わりにすることが出来たはずだ。それこそ、今すぐにだって。私に何の相談もなくすることが出来た。

なのにそうはしなかった……まだ、卷雲は踏みとどまっているのだ。そして私は、卷雲に拒否権を用意させることで、踏みとどまることを強要しようとしている。

卷雲が、狂気の淵で辛うじてバランスを保っている「観測者」が、叫ぶ。

「あげたくないですよ……! 私だってもう、こんな世界から逃げたいんだ!」

それは、私もそう。この世界に来てからもう一年が経つ。もう平成の日本に「俺」の居場所はないのだろう。よしんば居場所があったとしても「俺」は俺ではない「私」になってしまった。もうあの世界に帰れたとして、俺が俺に戻ることはない。

そしてそれは、巻雲はもちろんのこと、飛龍さんや風雲だってそうなのだ。

なるほど。だからまあ、終わらせるといふ選択肢も「あり」なのだ。「でも、私はまだ『私』だと思いたい。私はまだ自爆特攻テロリストにはなりたくないんです！ だからこれは……私の最後の、譲れない一線なんですよ……！」

「……………」

それでも、私に「拒否権」はないも同然だった。私がここで首を横に振っても、したら今度は本当の限界を迎えて皆で闇に落ちるだけだ。だって私には、何の解決策もないのだから。

……。

……いや、待てよ。

本当に、本当にそうなのか？

「……悪いけれど、巻雲。私は絶対、そんなの認めたくない」

私は、まだ何もやっていない。「出来ていない」ではなくて「何もしようとしてこなかった」。人生の最後、最後の最後まで、何もしないまま終わるのか？

そんなの、嫌だ。

でも。

でも。

こんな世界に生きるのは、もつと嫌だ。絶対に嫌だ。

「だから、巻雲……私を絶望させて。終わりにしてもいいって私が思えるぐらい、今がどれほど悪い状況なのかを教えて」

「……いいですよ、後悔してもしりませんからね」

後悔？ そんなの、もうずっとしてる。

私は怖かった。自分を喪うのが怖くて、ずっとずっと留まっていた。だから状況はどんどん悪くなった。そして私は、きつとそんな自分に失望していた。絶望していた。

でもきつと、それは巻雲も同じだ。彼女の航海日誌には何度も悔恨が現れる。こうしていれば、ああしていれば。みんな、私と同じだったんだ。

飛龍さんも……そして、自分を棄てるという選択をした風雲だって、そう。

それならここで踏み留まっている私は、きつと死んでも後悔する。

「後悔先にたたずって言うでしょ？」

だから全部聞かせて。私は巻雲にそう言ったのだった。